

花巻36号

No. 5



植物

名古屋大学郷土研究

隠岐の島

津坂峯隆

とうとうとうと
大河をわたるような
ふわりふわりとしがみつくような
小舟の上にいる。
島をまわる小舟の上にいる。
はるかなる
黒い空と海のつながらる
かなたより
孤々として押し寄せぬ
波は
小舟を慰撫し、
大いなる島を洗う。
中室を走る

むき出しの光は
わたしをつらぬき
白い波頭に落ちる。
そこでは
わたしは波と一つになつて
影を引き
島に向かうのだ。
わたしは
わすか四人の客のうちの
あなたに
一心に話しているのは
孤独に飼えぬわたしと
言いほしはない。
前の目に
島にわたる大きな船の中で
酔ったためにも
言いほしはない。

ああ、
あなたも
その船の中で
さらに酔っていたとは、
舟の前と
可憐な羽根を広げて
一心に飛ぶ魚よ。
おまえよ。
何故一人島を目指すか。
島の近くには
漁師が網を投じている。
沖には求める恋人もいよう。

あなたは
そのかわいそうな魚を
見はしない。
しかもわたしに
首をかたづけ

耳を借す。
それは旅故の
哀愁
それとも
海の
押しつける感傷故に。
島こえは勇者。
飛び魚は、
あなたは、
わたしは、
その心に引きゆく。

大学生活の末路

樋口清司

列車は富山に向っていた。車窓の景色は、森々に雪が多くなっていた。いつのまにか真白な雪景色に変わっていた。そんな中では、んやりと、大学入学以来、少しずつ大きくなっていた空虚感にたまらなくなっていた。いくのを感じていた。

小学以来学校の教師によって、両親によって、様々な環境が意図的に、自然に僕の中へ植えつけてきた価値観、因習、道徳……それらを何の批判力も持たず、受け入れ素直に信じて疑うことはなかった。そういう価値観のもと自分の世界観を築き、人生を計画し、新たは決意をとり生きていくことががんばったのが大学

でしまった。

先入観、既製の価値観、社会の偏見から、解放し、ほんとに自分で考え、確信した価値観をもった人間を、少くともそのきっかけでもつかんで卒業できれば、大学という存在はまことに大きなものにはなるのだが。今や自分で考えることすらとむなしく無意味なものだと思ふ程、破壊され尽してしまったのだ。自分自身の思考そのものが、すでに様々な環境によって毒されているのであり、どんな解決策も、それらの影響をまぬがれないのだから。

そしてとうとうにもならない空虚感と無力感の中で感傷すること、充実感を感じることと少なくなっていくのであり、怠慢と惰性の中へはいり込んでしまったのだ。

入試前後の姿だった。おぼろげながらも人生観の確立に成功し、充実した生活と努力をはじめた。しかしその努力はむなしいものであり、具体的な毎日の生活設計、計画はことごとく挫折せざるを得なかった。そしてその度ごとにむなしさが増していった。

いつの頃からか、大学という環境と様々な社会の動きを知るにつれて、信じて疑わなかった自分の価値観、人生観に批判的になってきた。かつて科学の世界において、絶対的なものの存在が、徐々に否定され、相対的なものと新たに見なおされていく過程や、数学の公理主義のように絶対的なものも不変的なものの否定を知るようになってますます自己の価値観は動揺した。そして毎日の怠慢と惰性の生活がそれに輪をかけて。いまやその疑問は自分自身の価値観を否定するだけでなく、社会的な道徳、真理まで破壊し、自己の新し価値観を造り直す方法すらもわからなくな

大学生活で既製の価値観や偏見の破壊に成功したものの、このどう沼からはいあがすべしと何とかして見つけたものだ。さもないと結局はなんともなく、それこそ惰性で現代の矛盾と欺まんに満ちた社会の奴隷となって黙々と生きていくだろうから。

すっかり雪で覆われた山谷を駆けぬける列車の快い振動と、トンネルを抜けるごとに展開する白銀の世界をながめつつ、ふと一つの切りを見たような気がした。



マンハッタン。

プロジェクト

梶浦 博一

紀元一世紀のローマ人プリニウスは、博物誌の中で次のような意見を述べています。「鉄は生活における最善にして最悪の道具である。鉄で土地を耕し、樹を切り、石を切る、家を建て、しかしまた鉄は戦争、殺人、強盗にも用い、直接殺しあうだけでなく、投げ道具にしあるいは羽根をつけて飛ばせる。死がいつとも早く人間に達するようには、死に翼をつけたのである。しかし自然には、責任がない。ポルセンナの市民は国王を放逐してローマ市民と講和条約を結んだ。がその条件は鉄を農業以外には、使用しないということであった。」

この言葉が、現代の私たちの考えにあまりにも似ていることに驚かされます。

この鉄という文字を原子力、核、化学反応におきかえてみますと、現在科化者が悩んでいることがうそのまま表現していることに気付くでしょう。人類の歴史は戦争と殺戮の展開であり、断えまない兵器、兵器の歴史でもあります。最初物理的な方法を用了しました。石、弓、剣、やり、この材質は石から金属へ、その強度はますます高くなり、射程距離も長くなりしました。次に火薬が発明され化学反応エネルギーが人類の手に渡りました。黒色冶金からTNTまで発達しその爆発力は強大になり大量破壊が容易になりました。次に化学の反応性を知るようになり毒ガスが発明され新しい殺害方法を思いつきました。そしてついに太陽エネルギーと同様の原子力を手に入れたのです。このエネルギーは非常に大きく今までの武器、兵器をすべて不必要にするほどの

ものです。原子爆弾は、アメリカに於て、歴史上初めて完成されたのです。第二次大戦中オッペンハイマーをチーフとするマンハッタンプロジェクトによって、このマンハッタン計画とは、原子爆弾の製造の暗号名なのです。最初の爆弾はプルトニウムとよぶ核分裂を利用したもので、現在アメリカ、ソ連のもつ二つのものは核融合を利用した水素爆弾です。天然ウランにはじが0.7%残りがプルトニウムの割合で入れます。この両者をラジオアイソトープと言います。

化学的性質は全く同じなのです。原子反応速度が少し異なるに過ぎないことがわかりました。物理的性質もよく似て、質量が235と238の違いだけです。しかし核分裂を起すのは235なのです。ですからこの235を分離するのが非常にむづかしい訳で一般には遠心分離法をつかっているようです。これ等の原子爆弾が落ちれば後に放射性物質が多量に残存します。

$^{44}_{20}\text{Ca}$, $^{46}_{20}\text{Ca}$, $^{48}_{20}\text{Ca}$, $^{50}_{20}\text{Ca}$, $^{52}_{20}\text{Ca}$, $^{54}_{20}\text{Ca}$, $^{56}_{20}\text{Ca}$, $^{58}_{20}\text{Ca}$, $^{60}_{20}\text{Ca}$, $^{62}_{20}\text{Ca}$, $^{64}_{20}\text{Ca}$, $^{66}_{20}\text{Ca}$, $^{68}_{20}\text{Ca}$, $^{70}_{20}\text{Ca}$, $^{72}_{20}\text{Ca}$, $^{74}_{20}\text{Ca}$, $^{76}_{20}\text{Ca}$, $^{78}_{20}\text{Ca}$, $^{80}_{20}\text{Ca}$, $^{82}_{20}\text{Ca}$, $^{84}_{20}\text{Ca}$, $^{86}_{20}\text{Ca}$, $^{88}_{20}\text{Ca}$, $^{90}_{20}\text{Ca}$, $^{92}_{20}\text{Ca}$, $^{94}_{20}\text{Ca}$, $^{96}_{20}\text{Ca}$, $^{98}_{20}\text{Ca}$, $^{100}_{20}\text{Ca}$, $^{102}_{20}\text{Ca}$, $^{104}_{20}\text{Ca}$, $^{106}_{20}\text{Ca}$, $^{108}_{20}\text{Ca}$, $^{110}_{20}\text{Ca}$, $^{112}_{20}\text{Ca}$, $^{114}_{20}\text{Ca}$, $^{116}_{20}\text{Ca}$, $^{118}_{20}\text{Ca}$, $^{120}_{20}\text{Ca}$, $^{122}_{20}\text{Ca}$, $^{124}_{20}\text{Ca}$, $^{126}_{20}\text{Ca}$, $^{128}_{20}\text{Ca}$, $^{130}_{20}\text{Ca}$, $^{132}_{20}\text{Ca}$, $^{134}_{20}\text{Ca}$, $^{136}_{20}\text{Ca}$, $^{138}_{20}\text{Ca}$, $^{140}_{20}\text{Ca}$, $^{142}_{20}\text{Ca}$, $^{144}_{20}\text{Ca}$, $^{146}_{20}\text{Ca}$, $^{148}_{20}\text{Ca}$, $^{150}_{20}\text{Ca}$, $^{152}_{20}\text{Ca}$, $^{154}_{20}\text{Ca}$, $^{156}_{20}\text{Ca}$, $^{158}_{20}\text{Ca}$, $^{160}_{20}\text{Ca}$, $^{162}_{20}\text{Ca}$, $^{164}_{20}\text{Ca}$, $^{166}_{20}\text{Ca}$, $^{168}_{20}\text{Ca}$, $^{170}_{20}\text{Ca}$, $^{172}_{20}\text{Ca}$, $^{174}_{20}\text{Ca}$, $^{176}_{20}\text{Ca}$, $^{178}_{20}\text{Ca}$, $^{180}_{20}\text{Ca}$, $^{182}_{20}\text{Ca}$, $^{184}_{20}\text{Ca}$, $^{186}_{20}\text{Ca}$, $^{188}_{20}\text{Ca}$, $^{190}_{20}\text{Ca}$, $^{192}_{20}\text{Ca}$, $^{194}_{20}\text{Ca}$, $^{196}_{20}\text{Ca}$, $^{198}_{20}\text{Ca}$, $^{200}_{20}\text{Ca}$, $^{202}_{20}\text{Ca}$, $^{204}_{20}\text{Ca}$, $^{206}_{20}\text{Ca}$, $^{208}_{20}\text{Ca}$, $^{210}_{20}\text{Ca}$, $^{212}_{20}\text{Ca}$, $^{214}_{20}\text{Ca}$, $^{216}_{20}\text{Ca}$, $^{218}_{20}\text{Ca}$, $^{220}_{20}\text{Ca}$, $^{222}_{20}\text{Ca}$, $^{224}_{20}\text{Ca}$, $^{226}_{20}\text{Ca}$, $^{228}_{20}\text{Ca}$, $^{230}_{20}\text{Ca}$, $^{232}_{20}\text{Ca}$, $^{234}_{20}\text{Ca}$, $^{236}_{20}\text{Ca}$, $^{238}_{20}\text{Ca}$, $^{240}_{20}\text{Ca}$, $^{242}_{20}\text{Ca}$, $^{244}_{20}\text{Ca}$, $^{246}_{20}\text{Ca}$, $^{248}_{20}\text{Ca}$, $^{250}_{20}\text{Ca}$, $^{252}_{20}\text{Ca}$, $^{254}_{20}\text{Ca}$, $^{256}_{20}\text{Ca}$, $^{258}_{20}\text{Ca}$, $^{260}_{20}\text{Ca}$, $^{262}_{20}\text{Ca}$, $^{264}_{20}\text{Ca}$, $^{266}_{20}\text{Ca}$, $^{268}_{20}\text{Ca}$, $^{270}_{20}\text{Ca}$, $^{272}_{20}\text{Ca}$, $^{274}_{20}\text{Ca}$, $^{276}_{20}\text{Ca}$, $^{278}_{20}\text{Ca}$, $^{280}_{20}\text{Ca}$, $^{282}_{20}\text{Ca}$, $^{284}_{20}\text{Ca}$, $^{286}_{20}\text{Ca}$, $^{288}_{20}\text{Ca}$, $^{290}_{20}\text{Ca}$, $^{292}_{20}\text{Ca}$, $^{294}_{20}\text{Ca}$, $^{296}_{20}\text{Ca}$, $^{298}_{20}\text{Ca}$, $^{300}_{20}\text{Ca}$, $^{302}_{20}\text{Ca}$, $^{304}_{20}\text{Ca}$, $^{306}_{20}\text{Ca}$, $^{308}_{20}\text{Ca}$, $^{310}_{20}\text{Ca}$, $^{312}_{20}\text{Ca}$, $^{314}_{20}\text{Ca}$, $^{316}_{20}\text{Ca}$, $^{318}_{20}\text{Ca}$, $^{320}_{20}\text{Ca}$, $^{322}_{20}\text{Ca}$, $^{324}_{20}\text{Ca}$, $^{326}_{20}\text{Ca}$, $^{328}_{20}\text{Ca}$, $^{330}_{20}\text{Ca}$, $^{332}_{20}\text{Ca}$, $^{334}_{20}\text{Ca}$, $^{336}_{20}\text{Ca}$, $^{338}_{20}\text{Ca}$, $^{340}_{20}\text{Ca}$, $^{342}_{20}\text{Ca}$, $^{344}_{20}\text{Ca}$, $^{346}_{20}\text{Ca}$, $^{348}_{20}\text{Ca}$, $^{350}_{20}\text{Ca}$, $^{352}_{20}\text{Ca}$, $^{354}_{20}\text{Ca}$, $^{356}_{20}\text{Ca}$, $^{358}_{20}\text{Ca}$, $^{360}_{20}\text{Ca}$, $^{362}_{20}\text{Ca}$, $^{364}_{20}\text{Ca}$, $^{366}_{20}\text{Ca}$, $^{368}_{20}\text{Ca}$, $^{370}_{20}\text{Ca}$, $^{372}_{20}\text{Ca}$, $^{374}_{20}\text{Ca}$, $^{376}_{20}\text{Ca}$, $^{378}_{20}\text{Ca}$, $^{380}_{20}\text{Ca}$, $^{382}_{20}\text{Ca}$, $^{384}_{20}\text{Ca}$, $^{386}_{20}\text{Ca}$, $^{388}_{20}\text{Ca}$, $^{390}_{20}\text{Ca}$, $^{392}_{20}\text{Ca}$, $^{394}_{20}\text{Ca}$, $^{396}_{20}\text{Ca}$, $^{398}_{20}\text{Ca}$, $^{400}_{20}\text{Ca}$, $^{402}_{20}\text{Ca}$, $^{404}_{20}\text{Ca}$, $^{406}_{20}\text{Ca}$, $^{408}_{20}\text{Ca}$, $^{410}_{20}\text{Ca}$, $^{412}_{20}\text{Ca}$, $^{414}_{20}\text{Ca}$, $^{416}_{20}\text{Ca}$, $^{418}_{20}\text{Ca}$, $^{420}_{20}\text{Ca}$, $^{422}_{20}\text{Ca}$, $^{424}_{20}\text{Ca}$, $^{426}_{20}\text{Ca}$, $^{428}_{20}\text{Ca}$, $^{430}_{20}\text{Ca}$, $^{432}_{20}\text{Ca}$, $^{434}_{20}\text{Ca}$, $^{436}_{20}\text{Ca}$, $^{438}_{20}\text{Ca}$, $^{440}_{20}\text{Ca}$, $^{442}_{20}\text{Ca}$, $^{444}_{20}\text{Ca}$, $^{446}_{20}\text{Ca}$, $^{448}_{20}\text{Ca}$, $^{450}_{20}\text{Ca}$, $^{452}_{20}\text{Ca}$, $^{454}_{20}\text{Ca}$, $^{456}_{20}\text{Ca}$, $^{458}_{20}\text{Ca}$, $^{460}_{20}\text{Ca}$, $^{462}_{20}\text{Ca}$, $^{464}_{20}\text{Ca}$, $^{466}_{20}\text{Ca}$, $^{468}_{20}\text{Ca}$, $^{470}_{20}\text{Ca}$, $^{472}_{20}\text{Ca}$, $^{474}_{20}\text{Ca}$, $^{476}_{20}\text{Ca}$, $^{478}_{20}\text{Ca}$, $^{480}_{20}\text{Ca}$, $^{482}_{20}\text{Ca}$, $^{484}_{20}\text{Ca}$, $^{486}_{20}\text{Ca}$, $^{488}_{20}\text{Ca}$, $^{490}_{20}\text{Ca}$, $^{492}_{20}\text{Ca}$, $^{494}_{20}\text{Ca}$, $^{496}_{20}\text{Ca}$, $^{498}_{20}\text{Ca}$, $^{500}_{20}\text{Ca}$, $^{502}_{20}\text{Ca}$, $^{504}_{20}\text{Ca}$, $^{506}_{20}\text{Ca}$, $^{508}_{20}\text{Ca}$, $^{510}_{20}\text{Ca}$, $^{512}_{20}\text{Ca}$, $^{514}_{20}\text{Ca}$, $^{516}_{20}\text{Ca}$, $^{518}_{20}\text{Ca}$, $^{520}_{20}\text{Ca}$, $^{522}_{20}\text{Ca}$, $^{524}_{20}\text{Ca}$, $^{526}_{20}\text{Ca}$, $^{528}_{20}\text{Ca}$, $^{530}_{20}\text{Ca}$, $^{532}_{20}\text{Ca}$, $^{534}_{20}\text{Ca}$, $^{536}_{20}\text{Ca}$, $^{538}_{20}\text{Ca}$, $^{540}_{20}\text{Ca}$, $^{542}_{20}\text{Ca}$, $^{544}_{20}\text{Ca}$, $^{546}_{20}\text{Ca}$, $^{548}_{20}\text{Ca}$, $^{550}_{20}\text{Ca}$, $^{552}_{20}\text{Ca}$, $^{554}_{20}\text{Ca}$, $^{556}_{20}\text{Ca}$, $^{558}_{20}\text{Ca}$, $^{560}_{20}\text{Ca}$, $^{562}_{20}\text{Ca}$, $^{564}_{20}\text{Ca}$, $^{566}_{20}\text{Ca}$, $^{568}_{20}\text{Ca}$, $^{570}_{20}\text{Ca}$, $^{572}_{20}\text{Ca}$, $^{574}_{20}\text{Ca}$, $^{576}_{20}\text{Ca}$, $^{578}_{20}\text{Ca}$, $^{580}_{20}\text{Ca}$, $^{582}_{20}\text{Ca}$, $^{584}_{20}\text{Ca}$, $^{586}_{20}\text{Ca}$, $^{588}_{20}\text{Ca}$, $^{590}_{20}\text{Ca}$, $^{592}_{20}\text{Ca}$, $^{594}_{20}\text{Ca}$, $^{596}_{20}\text{Ca}$, $^{598}_{20}\text{Ca}$, $^{600}_{20}\text{Ca}$, $^{602}_{20}\text{Ca}$, $^{604}_{20}\text{Ca}$, $^{606}_{20}\text{Ca}$, $^{608}_{20}\text{Ca}$, $^{610}_{20}\text{Ca}$, $^{612}_{20}\text{Ca}$, $^{614}_{20}\text{Ca}$, $^{616}_{20}\text{Ca}$, $^{618}_{20}\text{Ca}$, $^{620}_{20}\text{Ca}$, $^{622}_{20}\text{Ca}$, $^{624}_{20}\text{Ca}$, $^{626}_{20}\text{Ca}$, $^{628}_{20}\text{Ca}$, $^{630}_{20}\text{Ca}$, $^{632}_{20}\text{Ca}$, $^{634}_{20}\text{Ca}$, $^{636}_{20}\text{Ca}$, $^{638}_{20}\text{Ca}$, $^{640}_{20}\text{Ca}$, $^{642}_{20}\text{Ca}$, $^{644}_{20}\text{Ca}$, $^{646}_{20}\text{Ca}$, $^{648}_{20}\text{Ca}$, $^{650}_{20}\text{Ca}$, $^{652}_{20}\text{Ca}$, $^{654}_{20}\text{Ca}$, $^{656}_{20}\text{Ca}$, $^{658}_{20}\text{Ca}$, $^{660}_{20}\text{Ca}$, $^{662}_{20}\text{Ca}$, $^{664}_{20}\text{Ca}$, $^{666}_{20}\text{Ca}$, $^{668}_{20}\text{Ca}$, $^{670}_{20}\text{Ca}$, $^{672}_{20}\text{Ca}$, $^{674}_{20}\text{Ca}$, $^{676}_{20}\text{Ca}$, $^{678}_{20}\text{Ca}$, $^{680}_{20}\text{Ca}$, $^{682}_{20}\text{Ca}$, $^{684}_{20}\text{Ca}$, $^{686}_{20}\text{Ca}$, $^{688}_{20}\text{Ca}$, $^{690}_{20}\text{Ca}$, $^{692}_{20}\text{Ca}$, $^{694}_{20}\text{Ca}$, $^{696}_{20}\text{Ca}$, $^{698}_{20}\text{Ca}$, $^{700}_{20}\text{Ca}$, $^{702}_{20}\text{Ca}$, $^{704}_{20}\text{Ca}$, $^{706}_{20}\text{Ca}$, $^{708}_{20}\text{Ca}$, $^{710}_{20}\text{Ca}$, $^{712}_{20}\text{Ca}$, $^{714}_{20}\text{Ca}$, $^{716}_{20}\text{Ca}$, $^{718}_{20}\text{Ca}$, $^{720}_{20}\text{Ca}$, $^{722}_{20}\text{Ca}$, $^{724}_{20}\text{Ca}$, $^{726}_{20}\text{Ca}$, $^{728}_{20}\text{Ca}$, $^{730}_{20}\text{Ca}$, $^{732}_{20}\text{Ca}$, $^{734}_{20}\text{Ca}$, $^{736}_{20}\text{Ca}$, $^{738}_{20}\text{Ca}$, $^{740}_{20}\text{Ca}$, $^{742}_{20}\text{Ca}$, $^{744}_{20}\text{Ca}$, $^{746}_{20}\text{Ca}$, $^{748}_{20}\text{Ca}$, $^{750}_{20}\text{Ca}$, $^{752}_{20}\text{Ca}$, $^{754}_{20}\text{Ca}$, $^{756}_{20}\text{Ca}$, $^{758}_{20}\text{Ca}$, $^{760}_{20}\text{Ca}$, $^{762}_{20}\text{Ca}$, $^{764}_{20}\text{Ca}$, $^{766}_{20}\text{Ca}$, $^{768}_{20}\text{Ca}$, $^{770}_{20}\text{Ca}$, $^{772}_{20}\text{Ca}$, $^{774}_{20}\text{Ca}$, $^{776}_{20}\text{Ca}$, $^{778}_{20}\text{Ca}$, $^{780}_{20}\text{Ca}$, $^{782}_{20}\text{Ca}$, $^{784}_{20}\text{Ca}$, $^{786}_{20}\text{Ca}$, $^{788}_{20}\text{Ca}$, $^{790}_{20}\text{Ca}$, $^{792}_{20}\text{Ca}$, $^{794}_{20}\text{Ca}$, $^{796}_{20}\text{Ca}$, $^{798}_{20}\text{Ca}$, $^{800}_{20}\text{Ca}$, $^{802}_{20}\text{Ca}$, $^{804}_{20}\text{Ca}$, $^{806}_{20}\text{Ca}$, $^{808}_{20}\text{Ca}$, $^{810}_{20}\text{Ca}$, $^{812}_{20}\text{Ca}$, $^{814}_{20}\text{Ca}$, $^{816}_{20}\text{Ca}$, $^{818}_{20}\text{Ca}$, $^{820}_{20}\text{Ca}$, $^{822}_{20}\text{Ca}$, $^{824}_{20}\text{Ca}$, $^{826}_{20}\text{Ca}$, $^{828}_{20}\text{Ca}$, $^{830}_{20}\text{Ca}$, $^{832}_{20}\text{Ca}$, $^{834}_{20}\text{Ca}$, $^{836}_{20}\text{Ca}$, $^{838}_{20}\text{Ca}$, $^{840}_{20}\text{Ca}$, $^{842}_{20}\text{Ca}$, $^{844}_{20}\text{Ca}$, $^{846}_{20}\text{Ca}$, $^{848}_{20}\text{Ca}$, $^{850}_{20}\text{Ca}$, $^{852}_{20}\text{Ca}$, $^{854}_{20}\text{Ca}$, $^{856}_{20}\text{Ca}$, $^{858}_{20}\text{Ca}$, $^{860}_{20}\text{Ca}$, $^{862}_{20}\text{Ca}$, $^{864}_{20}\text{Ca}$, $^{866}_{20}\text{Ca}$, $^{868}_{20}\text{Ca}$, $^{870}_{20}\text{Ca}$, $^{872}_{20}\text{Ca}$, $^{874}_{20}\text{Ca}$, $^{876}_{20}\text{Ca}$, $^{878}_{20}\text{Ca}$, $^{880}_{20}\text{Ca}$, $^{882}_{20}\text{Ca}$, $^{884}_{20}\text{Ca}$, $^{886}_{20}\text{Ca}$, $^{888}_{20}\text{Ca}$, $^{890}_{20}\text{Ca}$, $^{892}_{20}\text{Ca}$, $^{894}_{20}\text{Ca}$, $^{896}_{20}\text{Ca}$, $^{898}_{20}\text{Ca}$, $^{900}_{20}\text{Ca}$, $^{902}_{20}\text{Ca}$, $^{904}_{20}\text{Ca}$, $^{906}_{20}\text{Ca}$, $^{908}_{20}\text{Ca}$, $^{910}_{20}\text{Ca}$, $^{912}_{20}\text{Ca}$, $^{914}_{20}\text{Ca}$, $^{916}_{20}\text{Ca}$, $^{918}_{20}\text{Ca}$, $^{920}_{20}\text{Ca}$, $^{922}_{20}\text{Ca}$, $^{924}_{20}\text{Ca}$, $^{926}_{20}\text{Ca}$, $^{928}_{20}\text{Ca}$, $^{930}_{20}\text{Ca}$, $^{932}_{20}\text{Ca}$, $^{934}_{20}\text{Ca}$, $^{936}_{20}\text{Ca}$, $^{938}_{20}\text{Ca}$, $^{940}_{20}\text{Ca}$, $^{942}_{20}\text{Ca}$, $^{944}_{20}\text{Ca}$, $^{946}_{20}\text{Ca}$, $^{948}_{20}\text{Ca}$, $^{950}_{20}\text{Ca}$, $^{952}_{20}\text{Ca}$, $^{954}_{20}\text{Ca}$, $^{956}_{20}\text{Ca}$, $^{958}_{20}\text{Ca}$, $^{960}_{20}\text{Ca}$, $^{962}_{20}\text{Ca}$, $^{964}_{20}\text{Ca}$, $^{966}_{20}\text{Ca}$, $^{968}_{20}\text{Ca}$, $^{970}_{20}\text{Ca}$, $^{972}_{20}\text{Ca}$, $^{974}_{20}\text{Ca}$, $^{976}_{20}\text{Ca}$, $^{978}_{20}\text{Ca}$, $^{980}_{20}\text{Ca}$, $^{982}_{20}\text{Ca}$, $^{984}_{20}\text{Ca}$, $^{986}_{20}\text{Ca}$, $^{988}_{20}\text{Ca}$, $^{990}_{20}\text{Ca}$, $^{992}_{20}\text{Ca}$, $^{994}_{20}\text{Ca}$, $^{996}_{20}\text{Ca}$, $^{998}_{20}\text{Ca}$, $^{1000}_{20}\text{Ca}$, $^{1002}_{20}\text{Ca}$, $^{1004}_{20}\text{Ca}$, $^{1006}_{20}\text{Ca}$, $^{1008}_{20}\text{Ca}$, $^{1010}_{20}\text{Ca}$, $^{1012}_{20}\text{Ca}$, $^{1014}_{20}\text{Ca}$, $^{1016}_{20}\text{Ca}$, $^{1018}_{20}\text{Ca}$, $^{1020}_{20}\text{Ca}$, $^{1022}_{20}\text{Ca}$, $^{1024}_{20}\text{Ca}$, $^{1026}_{20}\text{Ca}$, $^{1028}_{20}\text{Ca}$, $^{1030}_{20}\text{Ca}$, $^{1032}_{20}\text{Ca}$, $^{1034}_{20}\text{Ca}$, $^{1036}_{20}\text{Ca}$, $^{1038}_{20}\text{Ca}$, $^{1040}_{20}\text{Ca}$, $^{1042}_{20}\text{Ca}$, $^{1044}_{20}\text{Ca}$, $^{1046}_{20}\text{Ca}$, $^{1048}_{20}\text{Ca}$, $^{1050}_{20}\text{Ca}$, $^{1052}_{20}\text{Ca}$, $^{1054}_{20}\text{Ca}$, $^{1056}_{20}\text{Ca}$, $^{1058}_{20}\text{Ca}$, $^{1060}_{20}\text{Ca}$, $^{1062}_{20}\text{Ca}$, $^{1064}_{20}\text{Ca}$, $^{1066}_{20}\text{Ca}$, $^{1068}_{20}\text{Ca}$, $^{1070}_{20}\text{Ca}$, $^{1072}_{20}\text{Ca}$, $^{1074}_{20}\text{Ca}$, $^{1076}_{20}\text{Ca}$, $^{1078}_{20}\text{Ca}$, $^{1080}_{20}\text{Ca}$, $^{1082}_{20}\text{Ca}$, $^{1084}_{20}\text{Ca}$, $^{1086}_{20}\text{Ca}$, $^{1088}_{20}\text{Ca}$, $^{1090}_{20}\text{Ca}$, $^{1092}_{20}\text{Ca}$, $^{1094}_{20}\text{Ca}$, $^{1096}_{20}\text{Ca}$, $^{1098}_{20}\text{Ca}$, $^{1100}_{20}\text{Ca}$, $^{1102}_{20}\text{Ca}$, $^{1104}_{20}\text{Ca}$, $^{1106}_{20}\text{Ca}$, $^{1108}_{20}\text{Ca}$, $^{1110}_{20}\text{Ca}$, $^{1112}_{20}\text{Ca}$, $^{1114}_{20}\text{Ca}$, $^{1116}_{20}\text{Ca}$, $^{1118}_{20}\text{Ca}$, $^{1120}_{20}\text{Ca}$, $^{1122}_{20}\text{Ca}$, $^{1124}_{20}\text{Ca}$, $^{1126}_{20}\text{Ca}$, $^{1128}_{20}\text{Ca}$, $^{1130}_{20}\text{Ca}$, $^{1132}_{20}\text{Ca}$, $^{1134}_{20}\text{Ca}$, $^{1136}_{20}\text{Ca}$, $^{1138}_{20}\text{Ca}$, $^{1140}_{20}\text{Ca}$, $^{1142}_{20}\text{Ca}$, $^{1144}_{20}\text{Ca}$, $^{1146}_{20}\text{Ca}$, $^{1148}_{20}\text{Ca}$, $^{1150}_{20}\text{Ca}$, $^{1152}_{20}\text{Ca}$, $^{1154}_{20}\text{Ca}$, $^{1156}_{20}\text{Ca}$, $^{1158}_{20}\text{Ca}$, $^{1160}_{20}\text{Ca}$, $^{1162}_{20}\text{Ca}$, $^{1164}_{20}\text{Ca}$, $^{1166}_{20}\text{Ca}$, $^{1168}_{20}\text{Ca}$, $^{1170}_{20}\text{Ca}$, $^{1172}_{20}\text{Ca}$, $^{1174}_{20}\text{Ca}$, $^{1176}_{20}\text{Ca}$, $^{1178}_{20}\text{Ca}$, $^{1180}_{20}\text{Ca}$, $^{1182}_{20}\text{Ca}$, $^{1184}_{20}\text{Ca}$, $^{1186}_{20}\text{Ca}$, $^{1188}_{20}\text{Ca}$, $^{1190}_{20}\text{Ca}$, $^{1192}_{20}\text{Ca}$, $^{1194}_{20}\text{Ca}$, $^{1196}_{20}\text{Ca}$, $^{1198}_{20}\text{Ca}$, $^{1200}_{20}\text{Ca}$, $^{1202}_{20}\text{Ca}$, $^{1204}_{20}\text{Ca}$, $^{1206}_{20}\text{Ca}$, $^{1208}_{20}\text{Ca}$, $^{1210}_{20}\text{Ca}$, $^{1212}_{20}\text{Ca}$, $^{1214}_{20}\text{Ca}$, $^{1216}_{20}\text{Ca}$, $^{1218}_{20}\text{Ca}$, $^{1220}_{20}\text{Ca}$, $^{1222}_{20}\text{Ca}$, $^{1224}_{20}\text{Ca}$, $^{1226}_{20}\text{Ca}$, $^{1228}_{20}\text{Ca}$, $^{1230}_{20}\text{Ca}$, $^{1232}_{20}\text{Ca}$, $^{1234}_{20}\text{Ca}$, $^{1236}_{20}\text{Ca}$, $^{1238}_{20}\text{Ca}$, $^{1240}_{20}\text{Ca}$, $^{1242}_{20}\text{Ca}$, $^{1244}_{20}\text{Ca}$, $^{1246}_{20}\text{Ca}$, $^{1248}_{20}\text{Ca}$, $^{1250}_{20}\text{Ca}$, $^{1252}_{20}\text{Ca}$, $^{1254}_{20}\text{Ca}$, $^{1256}_{20}\text{Ca}$, $^{1258}_{20}\text{Ca}$, $^{1260}_{20}\text{Ca}$, $^{1262}_{20}\text{Ca}$, $^{1264}_{20}\text{Ca}$, $^{1266}_{20}\text{Ca}$, $^{1268}_{20}\text{Ca}$, $^{1270}_{20}\text{Ca}$, $^{1272}_{20}\text{Ca}$, $^{1274}_{20}\text{Ca}$, $^{1276}_{20}\text{Ca}$, $^{1278}_{20}\text{Ca}$, $^{1280}_{20}\text{Ca}$, $^{1282}_{20}\text{Ca}$, $^{1284}_{20}\text{Ca}$, $^{1286}_{20}\text{Ca}$, $^{1288}_{20}\text{Ca}$, $^{1290}_{20}\text{Ca}$, $^{1292}_{20}\text{Ca}$, $^{1294}_{20}\text{Ca}$, $^{1296}_{20}\text{Ca}$, $^{1298}_{20}\text{Ca}$, $^{1300}_{20}\text{Ca}$, $^{1302}_{20}\text{Ca}$, $^{1304}_{20}\text{Ca}$, $^{1306}_{20}\text{Ca}$, $^{1308}_{20}\text{Ca}$, $^{1310}_{20}\text{Ca}$, $^{1312}_{20}\text{Ca}$, $^{1314}_{20}\text{Ca}$, $^{1316}_{20}\text{Ca}$, $^{1318}_{20}\text{Ca}$, $^{1320}_{20}\text{Ca}$, $^{1322}_{20}\text{Ca}$, $^{1324}_{20}\text{Ca}$, $^{1326}_{20}\text{Ca}$, $^{1328}_{20}\text{Ca}$, $^{1330}_{20}\text{Ca}$, $^{1332}_{20}\text{Ca}$, $^{1334}_{20}\text{Ca}$, $^{1336}_{20}\text{Ca}$, $^{1338}_{20}\text{Ca}$, $^{1340}_{20}\text{Ca}$, $^{1342}_{20}\text{Ca}$, $^{1344}_{20}\text{Ca}$, $^{1346}_{20}\text{Ca}$, $^{1348}_{20}\text{Ca}$, $^{1350}_{20}\text{Ca}$, $^{1352}_{20}\text{Ca}$, $^{1354}_{20}\text{Ca}$, $^{1356}_{20}\text{Ca}$, $^{1358}_{20}\text{Ca}$, $^{1360}_{20}\text{Ca}$, $^{1362}_{20}\text{Ca}$, $^{1364}_{20}\text{Ca}$, $^{1366}_{20}\text{Ca}$, $^{1368}_{20}\text{Ca}$, $^{1370}_{20}\text{Ca}$, $^{1372}_{20}\text{Ca}$, $^{1374}_{20}\text{Ca}$, $^{1376}_{20}\text{Ca}$, $^{1378}_{20}\text{Ca}$, $^{1380}_{20}\text{Ca}$, <

五十km 射程一万二千kmですから、30分で地球の4分の所まで届くことになります。アメリカの中心にすれば地球の半分が射程内に入ります。ICBMのタイタンやミニッツマンは十と百メガトンの水爆を搭載しているのです。また人工衛星の使用によつて、どこへでも短時間に(十分以内)に爆することが可能なのです。古いデータですが十九五五年現在、B52の核ICBMはミニットマン一四〇〇台ポラリス型潜水艦に二隻の兵器が空と海をセウ回しているのです。世界中で所有している火薬、原爆をTNTに換算すると、一人当たり二トンになるそうです。全世界人口が五億ですからこの量がわかると思います。TNTは二トロトリエン火薬は一人に一〇〇kgあれば十分です。攻撃は、最大の防御という言葉がありますが、元来兵器には、攻撃用、迎撃用があります。攻撃ミサイルが相手の固定標的半径一・六kmに命中

の基で迎撃します。この時ICBMすべての撃てざる確率は十三・二%なのです。ホマークBの命中率を90%とすれば、この確率は10億分の一になります。ちなみに神風隊の命中率は40%撃てたのは6%でした。このように考えてみますと飛来するミサイルを完全に防ぐことは不可能です。ポラリス型潜水艦があります。これは核弾頭を付したサブロックを搭載しています。水中で音波が通らないため、超音波を使用して迎撃するのが、この速度は海水中一・五km/secです。今ポラリス原潜が目標の四〇kmの所で来た時相手のソナーの音波が、これを迎えたとします。その時サブロックが発射されているとサブロックが達するのに二・七秒ソナーに音波がもどるまでに二・七秒待つて一分三秒しかないから、このサブロックを迎撃することは不可能です。だから原潜が沿岸から四〇・五kmまで行くことができたとなると、その攻撃に対する防御はできないということなのです。です

する確率を%とし、一発のミサイルが相手へ防御網や迎撃ミサイルに撃たれる確率を%とすれば(実際現在ではまたこの値より低い)ミサイル一発のとき、標的が生きたる確率の七五%標的が破壊される期待値の二五%発射の時の六期待値の九四である。ですから命中率が高いものを使つたり少し悪くても、多量に同時に発射すれば破壊する期待値は、大きくなるわけです。一方迎撃用ミサイルとして地对空ミサイルがあります。ナイキX、ホマークBなどです。この撃て原理は、自動誘導方式ですが、直接相手のミサイルに当ることはないので、つまり一定の範囲がありまして両者がその範囲に来たとき、核爆発を起し、そのエネルギーで相手の核を爆発させるのです。今ホマークBの命中率を90%であるとしても二〇〇基のICBMがほとんど同時に独立に飛んで来たときホマークBの二

から、核戦争になった場合この国も存続することは不可能なのです。日本が核の力の下にあるといつても、實質的には何ら防御されないのです。日本の自衛隊の戦力では、たとえ米国援助があつたとしてもICBMを投入されたら防御できない状態です。それ故今の戦力を十倍、百倍にしたところで、何ら自衛の役目をはたすことはないので。ただ外交における心理的役目を果たすだけです。しかしそれがどれほど効果的か、(指導者はどう簡単に信じているか)疑問です。現にベトナムにおける米軍を見ればわかるでしょう。兵器の製造がいかに無益な投資かと理解していただけだと思います。もう一つ重要なものがあり、あります。現在原爆の影にかくれて、着々と研究開発が行なわれているのに生化学兵器があります。大戦中禁止された、オースを代表として、ナバーム弾、枯葉剤に使用された除草剤などです。

人間は生物であります。だから身体は有機体化合物です。その上都合の悪いことに、人間の消費できる有機体はその構造が厳格に定められていますし、身体を構成する化合物も又、同様に定められています。位置にHがつく所へHが入ったとすれば、それだけで影響が、あらわれるそうです。細菌やビールスにX線、紫外線、放射線、ある種の薬品を与えて、突然変異を起させます。その中で毒性を持ったもので、従来のものと構造の異なるものを増殖させ、これを兵器とするものです。

この兵器に対する防衛は何もありません。化学兵器に毒薬があります。フグ毒は近年日本の学者によって構造が決定されました。この決定は合成につながっているのです。その意志と資本があれば容易に合成されるでしょう。この毒はPPM単位で作用します。百万分の一、一TONの水に1gのフグ毒を混入すればそれで人間は死んでしまいます。ですから1gも製造できれば、日本を滅亡させることが出来るわけですね。

がゆを主成分としていますが、COをわずかに含有します。一般にゆを燃焼によって発生する場合必ずCOを伴います。又耐火建築やプレハブ住宅に化学処理をした建築材を使用しますが、不良品とか、難燃性のもものは、炭は出しますが高温になると、分解して毒ガスを発生します。シアン、CO、NO、SO₂等々又ホルマリン系樹脂(ホルマリンを含有する)を熱湯に浸せばホルマリンがでえます。用途をまちかえば、生命にかかわります。食器などはビニール系スチレン系を用いるべきなのに、又薬品には致死量があります。ですからどんな薬でもへたな食べ物はよく食べないで死を招きます。現在加工食品が多く出回っています。その中に有害なものも多々あります。着色食品はほとんど人工染色してあります。染料はまず肝臓からおかします。防腐剤が入っており、一般に加熱すると分解するものが多いようです。非常に白いのも、漂白されているのです。現在食品用、薬用に使われている化学薬品が人体に有害か、無

とも云々わけです。これまで述べてきたことは戦争を考えていたのですが、日常においても、私たちの回りには、危険が一掃なのです。石油化学における公害問題もその一例です。日本では日産30万バレルの原油を処理しています。原油の中にはイオウが0.25%含まれており、中東の2%前後ですが平均して1%としますとピッチを除いて計算しますと日に三百トンのイオウが亜硫酸ガスとして排出されていることになり、軽油、灯油、カンリンは比較的少ないのですが、重油になり、平均6%のイオウを含んであります。従って硫黄といふことが非常に重要な問題なのです。煙突を高くすると、よって拡散しようとしており、それが、それは汚染地域を広げるだけの結果しかありません。石油ストーブ、ガスコンロ、自動車、の排気ガスなど

が完全に判明しているのは少ないのです。特に長期的に作用してくるものは打つ手が無いのです。次に添加物を表にします。

食品		食品添加物	
良	御飯	防腐剤(ベニレート、キヤイド)	
	みそ汁	品質改良剤(塩化ナトリウム)	
良	佃煮	甘味料 調味料	
		保存料(安息香酸ナトリウム)	
		着色剤 糊剤	
朝	味噌	保存料(安息香酸ナトリウム)	
	しょう油	(パラオキシ安息香酸ナトリウム)	
調	調味料	グルタミン酸ナトリウム	
		イノシン酸ナトリウム	
		グアニル酸ナトリウム	
良	パン	小麦粉改良剤	
		過酸化ベンゾイル	
		イーストフード中の成分	
		塩	

告 本来ならば、こゝに百瀬氏の小説（ある夜の酒場）を転載するところ、メ切り間違となり、卒業諸先輩送別コンパにどうしてと完結せねばならぬ都合上、次回にまわします。おわびかたがた御報告まで。なお無読

男 郷研 に行く

西川 孝

大戦争もこのことながら、我々の学問、
大の郷研に於ても、いろいろの問題が
えられます。反ばすながら、一年半の活
動して来たなかで、将来の郷研はこうある
べきではなからうか。あるいは、現在のこ
ういふ点をもっと改善したらどうか等、い
ろいろ考えて升手したか、何れにも充分に
たものではありませぬので、いろいろ
批判が出てくると思います。批判も覚悟し
ていまして、どんな出して来なさい。
てし前書きはこの程度にして、本論に納
めたいと思います。先づ、郷研の将来を語
る前に、是非とも考えねばならない現在の
う活動の問題点をあげておきたい。それ
が、一に何れ目的で研究するのにか？ とい
う。たゞ素朴な疑問です。ある人が言う

には、「そんなもの求めているんじゃないか」と
だ単純にこれだけで済ませてしまう。思うに
こんな簡単に済ませられる問題ではないと思
う。現在研究している、名古屋全般につ
いて、それとレポートの時に、皆に発表する
たがそれだけのことである。いったいこれで
何か得られるというのでしょうか。確かに、
断片的な知識（名古屋について）が多少増え
るかも知れないが、そんなものは、我々の研
究の目的ではないはずである。むしろそれら
を手段とするべきものであろう。我々の研究目
的は、現在の生活している民衆、木々々言え
ば、社会全般との関連の中で、獲えていかねば、
ならないのではなからうか。だから例えば
名古屋に關して云えば、名古屋について調べ
たことを、ただそれだけで、終ってしまうの
でなく、更に二の目で現地へ行つて、
地踏を見て、確かめ、出来れば、その当地の
人々の話を聞か、その資料が正確か、現在に
於てどの様に、その生活する人々に把握され

あえられていろかを調べてこそ、我々の
の目的に合ふものなりである。と考える
。二の目で確かには現在我々の研究活動は
歩後退（二歩前進して三歩後退）している
てはなからうか。懐古趣味も大いに結構
すが、これは老人的思考であつて、我々
人が考えることではなからいと思ひます。
我々がやることは、今言いました様に
も現在の関連で物事を処理し、批判
の能力を、養ふことではないでしょうか。
二に交流について言います。今年度は
中大、県大ともに一環づ一行なりました。
年庄にその感想をうかがいますと、仲々
もしろかつたというものでした。交流会
が一回目であつたため、お互いに名前を
り合ふ程度しか出来ませんでした。こ
を基礎に少しでも確立する様な形にも
いくことが、望ましいと思ふ（例えば、読
会、研究会等）しかし中には、研究なん
がずらわしい、合ハイ形式で好きな事を
し合いたいという人の、とすると

こちらの方が多いかも知れませんが、あるだ
らう。この案についてまだお互いに話し合
ひがあまりありません。
オオに、オオの奥と少し関連があるのですが
純粋な研究を通じての交流をも考える必要が
か考と思ひます。これは互いに資料を交換し
合つて、レポートを交換し、互いの研究の向
上に與へるものと交流するのです。現在と
して過去の研究活動をふり返つて、研究対象
を今までの様に、郷土というせまい枠の中だ
けでとらえるのではなくて、日本全国にまで
広げていく必要が生じてきますが、しかし、
いざ急には、東洋不可能です。さしあた
つて、中部郷土研究連盟を設立し、中部地方
各大館の協力の基で、互いに協力し合つて、
研究し互いに資料交換、研究発表を行なつて
い、たらどうでしょうか。
この様な事を言うに、キツト批判が大部出る
でしょう。その批判も、ほとんど次の様な
のではありませんか。即ち、名大郷研の中
でさえも、充分な研究が出来ていないのに、

かし、ただ城の美しさに心をひかれてい
る。いうより、僕の心のひかれてゐるのは、
その単調としか見えない、石垣ではないの
だろうか、こう思うようになった。たのも、最
初のことである。あるところうは、盡然と積
あけられ、一介のすきもないほどであり、
水でも、しみめば崩れおちそうに垂っ
り石垣もある。しよせんは石を縁おあげ
にすぎないとしか見られぬ。しかし、
れこそが最大の努力をつぎ込み、最大
の犠牲を払われてつくられたものである。
さながらにして、土に埋もれた人間……
間の執念が一っつり石から積み上げら
れた石垣から感じられ、その力は我身を圧
迫しやうである。近くでみるとわかるよ
に、石垣の刻線が外のは、この城の特
の一つと思われる。しかしこれにしても、
時の苦勞をも物語つてゐる。面白半分に
た幼稚な家形。この裏には、一個の石
も大事にする旅ごましの努力の結果とい
ふ事もある。まさに石垣は人間である。

精神切りになつても出さなりのは、常の
であり、今度も、であるが、時間があ
りなく、高校三年の時に書いた文章を、
し直して、ここの文庫の序稿としてま

天に表情があるように、石垣も季節によつて
全くちがつてゐる。石垣全体が夏草におおわれ
夏草特有のにおいが、からだ全体を刺激するの
は、何んとも好かない。むしろ真冬の石垣の、
あらわになつてゐる方がずっといい。その時
こそ石垣の意趣が味わえる。一見すれば、あ
んなく崩れやうではあるが、三百年の國運に
耐え、檐はもびても、この石垣だけは崩れて
いない。時の人間の生命が何かと妙に絡ま
りあつてひしひしと、應ぜられる。寒風が吹
荒び小雪が舞う、その中、石垣にしがみつ、
足が、かくかくるえるのも忘れ、頭の中は
空っぽになる。雑念の入る余裕もない。この
時ほど石垣が生きなのは無い。石垣の底に、
今はまを束ねた礎石。ここからも石垣から感
じる感情と似たものを感ずる。いや、ここには
空虚の押しかないのか。

夏草や 兵じもが夢の跡

最近読んだ某雑誌に、ある評論家が、石垣に
いう隨筆を書いておられた。石垣を愛する人
が身を感じられて何だかうれしかった。

クラブについての断片

伴 藤 明 徳

1 日常生活からの希望

現代では、人生とは何か、人は何のために生
きるのか、等いはゆる、人生論的思考に對し
て幾種する傾向が強くなつてきた。確かに、
人間疎外の時代と言はれるように、非人間化
が進みつつある。現代は空虚の時代であり、
人はそもそも無意味な存在なのであるという
考えが支配的となりつつある。しかし、にせ
糊の思ふ家達は、始めから世の中について考
えることは無意味であり、人はただ一日一日
を分けもなく生きてゐる動物にすぎないとい
う定義を下してしまふ。それでも、社会を
押し剥り剥して現存の問題にぶつかり、そこ
から世の中の意義を、人の意味を知ろうとし
ないわけである。彼らはにせの合理主義者であ
る。彼らは自分の弱さをそれによって、覆け
隠してしまふのである。それだとも問ひ

おして答へたり。私は現代のニヒリズム
認めたり、しかし私は問う、なぜそんな
とかええるかと。人は人生を考へるの
無意味だと云う。私は問、なぜそんなこ
かりえるかと。私はありまゐるにむ。
いまいは来して、反省をもたらさない
らだ。進歩をもたらさないからだ。あ
まゐは習慣になると恐しい。それは終
末感を伴はつてくる。人間は何が正當な
か分からなくなつてしまふだろう。だが
果しなかりもしれない。しかし考へたい
だ。どこまでも、なせつて。私は若いの
。生計の心配もいらないのだ。人の世は
無かももしれない。虚無でないかもしれな
。しかし感情を日々埋没しなすために
。考へたいのだ。いつまでも。

私とクラヴの通ひ合ひ。

私の用語に「自己」と「他者」という概念がある。
ここでは、「自己」と「他者」とは一体を成すべき
。それともできないか。できるとしたら
かなる方法においてなのだろうか。重

たとしても、そうだが格言も元来、適用範
囲を考慮に入れないと、危険な思想にな
る。不言実行という格言もそうだと思う。
つまり「実行」の適用範囲である。世間一般
ではよく使ふ「実行」の内容は、一人で出来
るものである。たとへば紙くずを拾うと
か、席をゆずるとか、そうじをするなど
である。しかしいつのまにか「実行」の内容
が複雑でしか出来なすことに變化してい
りである。そうなるに、明らかに民主制
化するものである。「実行」の内容がきつめ
ありまゐるに変われ、それが力あるものに
も有利に働くことにならうである。だ
ら。ただ実行を一つ潰えのうちに、言ひ
る方ではなく、もつと内容自身で考へて
くべきである。たとへば、Aが暴言する
しよう、Bは実行がまずまずだと言つし
る。BはAより何らかの力を持つてりる
。現象はどうなるのか。それはBは
に對して何もいふな。ただだまつてやれ、

尋ね問題となる。さて私は、自分の意見を述
べる場合、以上のように考へ引つ込み思案に
なつてしまふ。私自身の考へは利己的なもの
であり、他人に言ふべきでない。それとも、私
の考へは当然他人とも共感を與へるべきもので、
皆で話し合ふべき問題であるにちがひない。
しかし以上の事を解決するには、話し合ひよ
り他に方法があるであらうか。自己満足すべ
きものであるか、それとも他人とともに考へるべ
き問題であらうか、せめてそれだけでも知る
には、まず言つてみるべきであると思う。私
の発言は確かに社会に通じないかもしれな
。しかし、自分の考へを外に出したり。言つて
みたりのだ。他人と共感したりのだ。まずそ
の意見があまりものであらうかと、まず話し
てみたりのだ。自己の内だけで思つても、無
駄な事ではなからうか。私は自分の意見を言
う。思つてゐることを言う。言ひたりのだ。
まず言つてみることにする。そのような場が
私はほしい。
。不言実行という格言。

封建的であると言わねばならぬ。
話し合ふことは必要だと思ふ。個人／＼が孤
立したるために。複雑による話し合ひは特
とくに話し合ひが重要である。私は言ひたり
実行をたださばつたは危険だと、意識されな
り暴力で実行せよと取り去らねばならぬ。
それと同様、ナチズム、まじめだ、キガだ、
なども当然暴力である。そのような暴力の中
では力のあるものが必ず勝つ。そしてそこ
は話し合ひは来して行なわれなす。意識さ
れなす暴力、私は、これを取り去りたりのだ。
そして、学生のうちだけでも討論を話し合ひ
をしたりのだ。私のクラブ内では、それが出
来ると思ふのだが。
4. 郷土の概念
郷土はじつにありまゐる概念はない。それで郷土
の説明はいつも一面的になるのである。とし
て郷土研究も当然ありまゐるものである。
まず郷土の概念のありまゐるである。クラヴ
との研究内容にして、僕に複雑な味にわたつ

實際に、日夜うごめいてゐる社会である。自己閉鎖的な郷土感はあるに否定はしないが、その範囲は限るべきである。そして悪しき郷土感には捨て去らねばならない。郷土感は一人間のエートピアを求めてゐるやうで、東は空洞となった非人間的な物体を見やすいことも自覚しなければならぬ。いつも、過去を調べるときでも、現東を忘れてはならない。郷土研究はまず現東から出発すべきである。そして現東に生きてゐる我々自身から出発すべきである。そこから過去の歴史、文化、風俗など調べるときが住まなくては。そしてまた遂に日常生活における創造的意欲も出てくるのではなからうか、そして現東に心づかつて始めて、人間の存在の意味を思ふ。といつても現東は幅広い。しかし現東は一つである。そこに現東の重みがあるのだ。そこで日常生活における創造も、そこから生まれてくる。ここで、一つの問が出してくる。では君は一体

何をやろうと言ふのか？私は答へる。それだ。皆で考えていこうではないかと。この問はあつて意味では無責任であるかも知れない。しかし私はこの現東の上に立つと立たないのか？はかなり大きな差が！それは根本的である。あつて思ふのである。そして今のクラブの内部を変えない限り、今のようならずでそのまま続くような気がする。私自身はそれがいやなのだ。だから述べたのだ。たとえ皆に受け入れられなくても、私自身確認できただけでも私にとつては有意義だと思ふからである。

小さな世界

伊藤明德

近頃、人間の本质についての書物が盛んに売れ、マスコミ関係者の間で話題にのぼらない日はない。ある作家など、人間は虫けらに等しい動物だが、唯性器において優れていると断言して一躍名をなし、おまけに大金持になった。又、ある田舎の書道家は、清書中、あやまうて墨を落とした所、そのしみの形がまさにへそに似ており、折にも雷鳴が起った。明晰なる頭脳を持った彼は、そこで雷様がへそを狙うのは、人間の魂がへそに宿っているに相違ないと相起し、次の深淵にして難解なる名言を考へついた。
「人間の本质はへそである」
たちまち熱狂的なファンに服はめちやくちに破られた。困った彼は、便所に隠れ、いつのまにか、そこが彼の仕事場と

これにも成功したR氏は、最後の命掛の冒険にとりかかった。何と、殺すのである。五万と、アリを。

いよいよ彼は、人間の本性について研究するため、ニワトリ小屋に入った。卵で栄養をつけ、めんどりを抱いて、いかなる寒波にも対処することにした。

彼はニーチェを紐解いた、温古知新を実行するためである。ニーチェは、女に鞭が必要だ、そして人は権力を志向する動物であると言ったという。R氏は負けず、世にも判明なる解釈を下す。人間には男と女があり、それらは本質的に異なる。それらの関係は、女は馬であり、男はニンジンを持った騎手である。かくのごとく、彼は西洋思想家をことごとく、単純明快に解釈し、東洋思想家にまで手をのばした。孔子の十有五に始まる文句より、R氏は独断を下した。人間は、元来、段階的に成長する単純な生物であり、弁証法的成長は、すやかしてある。

なった。彼は前の名刺を変えてしまった。

「人間の本质は排泄作用である」

国中の人々で才能あると思うものは皆、冥想にふけた。R氏もその一人である。R氏はがめつくも金持になった時のことを考えていた。

「さて、金が入ったら何をしようかな」「さんまを食べたらすぐに便になるほど食べないな」

「いや、つまようじを皆買い集めようかな」「さてよ、その前に札幌を見て気絶するといかないから度胸をつけなくては」

R氏の厳しい修業はかくして始まった。

始めに、動物園に行つて盗んでくることである。すなわち、檻から糞を、毛虫の。数回試みた後、満足したR氏は、銀座に出かけた。高級キャバレーを襲うことにした。R氏は、カウンターに行き、水を飲んで、ハイボールを注文して、忍者のようにさつと便所に行くふりをして、逃げて来たのである。

しかしR氏はあまりにも多くの結論が、皆真理に思われてきた。R氏は苦闘した。

「真理は一つであるか、複数にあるか」

まさにその時、国会の討論の实况放送が身に入つた。肥満で柔和な政治家は口を切った。

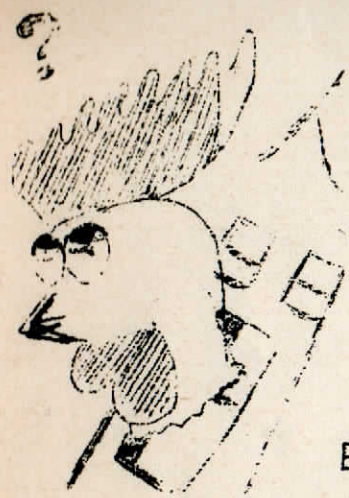
「エッ、最近特に盛んになつてまいりました学生運動は悪いと思ひますが、もちろん、ある意味でございまして、誤解のないように、エッ、ウッ、ヘン、まあ彼らなりに考えてやうにしている、とで、エーその見解に立ちますと、まあ、エーそれよい訳ですが、エッ、ヘン、世論は例いってますかと申しますと、まあ、エーヨロニヨロンと申しまして、結局学生はよくないと思ひますが、しかし何ですわ……」

R氏ははたと手をたたいた。結論は、勇断に堂々爽快に下した。真理は一つである。すなわち次のごとく。

「人間は、元来、記の分からぬ生きものである」

は、次に出版会社を探す必要があった。
「ああ、や」と、おれも人のために役立つ、その上に金持ちになれるとは」
彼は満身に微笑をたたえた。幸せそのものであった。ついにR氏は、ニワトリ小屋を出ることにしたが、出るとまもなく、ほかからひげの茂みが生えている一人の農夫に連れもどされてしまった。
なぞって！

R氏は、人間の本質を思索し、探求しているうちに、彼自身、ニワトリに変わり果てていたのだ。



END

連載小説(1)

昭和元禄

作・仁志川火呂志(ま)

このお話は、日本の中部地方にある大都會の、ほんのその中の何十分の、いや何百分の一の地域に住居する人々のお話でございます。

昭和44年、1月上旬、雪がまだ路端にかすかに残り、あたかも白石の白と黒の様に、雪の白と土の黒とが見事に対照をなしていたある日のことでございます。

年も明けて、もうすぐ春というのに、小鳥

たちもまだ、冬の寒さの為かその鳴き声もほとんどかねばけにやうな声でピョピョ

ピーと鳴いて、「春よ来い」早く来い」と一年中で一番楽しい春を待ち望んでいるのでございます。

朝8時をちよつと廻った頃のことでございます。この時刻は、いつも通勤、通学者で、電車の中は定員の200%以上も押し込められ、人々は、愚痴もこぼさず、それぞれの目的地へせとせとあえぎあえぎ、それはあたかも先日終ったメキシコオリンピックのマラソンの君原選手の顔の表情にも似て、いかにも苦しううに走っているのでございます。

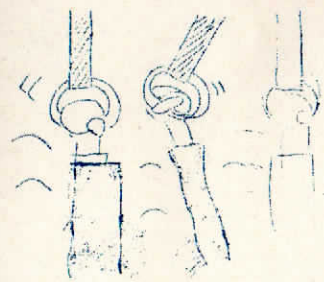
織川秀彦は、この町にある有名大学の2年生で、法律を専攻してはいるのでございしますが、受験科目がまださめやらず、今だにだらだらと何もしないで、クワグにも参加せず、勿論授業にもほとんど顔

を出さず、試験になると友人から一枚いくらかで、ノートを買って、一夜づけで看ましているのでございます。

こんなわけで2年間、なんとなく過ごしてきたのでございますが、彼の故郷は瀬戸内海に面した、四国の小さな漁村に生まれ、田舎ですから都会の様に、刺激がなく世の中を知らないまま高校を卒業した為でございます。まあ、小さい時から勉強が好きではなく、いや、もつとはっきりいいますと、嫌いで遊びばかりに無中になっておりました。その遊びと申ししても性(セグス)に関するものばかりでございます。例えて申しますと、小学生の時、同級生の女の子を学校の帰り道に、呼びとめて、お寺の本堂に無理やり連れ込んで、性交のまねごとをしたり、又、女の子のスカートをめくったり、時には先生のスカートを手からぬいたり、それはそれは、まったく早熟な子供の様でございます。しかし、

た。それは頭の切れが良いこと、俗に言
て、頭が切れること、遊んでいて勉強は
出来なくて、村の学校
に行かなくていいのでござい
ます。期末試験の
いつもは朝遅く、
今日ば試験
が始まる中、私が頭の中の脳細胞によつ
て起され、それが筋肉の収縮を
起し、体を起こさねたのでございま
す。めずらしく早く起きてあわてて
に乗り、駅で電車に乗り換えて、
という所で降りてそこから歩いて15
分の大学へ行けるのでございました
ども、今日はちよつとした、否大愛
事件があつたのでございます。

ました。刑事の言葉の中には「大学生のくせに」「はずかしくないのか」という言葉がやたらと吐き出されている様でございませう。この言葉が如実に警察官の取調への態度を示しているのをごさいます。この刑事は、大学生は人間とは思ってはいない様でございませう。冗談じゃございません。大学生だって人間でございませう。大学生は聖人ではございません。世間では一般に「よくない行為」とされている事を大学生がしても決しておかしくありません。それを「大学生のくせに」と考えてしまつては、人間を真に理解することは出来そうもないのをごさいます。彼はこんな考えで終始黙つていたのをごさいます。この結果、彼は書類送検され、大学の籍と除かれたのをごさいます。後になつて彼から聞いたのをごさいますけれど、あれは、女性との合意の



のである。このように思ふからといって必ずしも郷土を愛する心を持つてゐるとはいえないが、郷土と自分とを何か同一の、又我々の心に溶け込んでゐるとする時があるのである。

郷土が大好きだ。そこで愛する私を土を親愛なる御所の諸君に紹介し、語りたれと思ふ。

関ヶ原では大きな合戦が三つあった。壬申の乱と関ヶ原の戦いである。壬申の乱が関ヶ原で合戦の火ぶたが切りれたことはあまりよく知られてゐない。関ヶ原の西の端、つまり岐阜県と滋賀県の境を流れる関の篠川をはさんで両軍相対し、現在より玉付近で戦いの火ぶたは切られたのである。壬申の乱についてはみなさんよく知つておられるのでここでは述べないが、おもしろい話が残つてゐる。それ藤川を境として西岸にあたる関ヶ原山中には弘文天皇を祭神とする八幡神

ここで説明できないのが残念である。前に述べた部勢の一つ松尾に不破の関がある。日本三関の一つ不破の関は東山ののど首で、東国に対する京畿の防壁の地点であり、軍事上重要なところである。又、旅人の往来も盛んで古今の文

人によつて多くの詩・歌や物語が残されてゐる。そのうち二・三を紹介しよう。人すまぬ不破の関屋の板びさし
あれにし後はただ秋の風

——新古今集——

美濃国関の藤川わたるほどに
まず思ひつづける。

わが子ども君につかへむためならて
不破の関屋の板びさしは

今もわけらざりけり

ひまおほき不破の関屋はこゝろほどの
時雨も月もいかにもるち

——十六夜日記——

社があり、東岸の松尾には天武天皇を祭神とする井上神社があつて、部落の不和が永く続いたという話である。山中、松尾の部落では部落間の婚姻はもとより、話しをすることさえなかつた。明治の終り頃、一才の部落ではランプから電燈に変わったが、それに對抗して、もう一方の部落では太平洋戦争の前まで電燈を使わずランプで生活してゐたところである。こつちの面から民衆と土地、慣習のつながりをおもひするのとおもしろいと思ふ。

又、山中を流れる黒血川は、両軍の血潮で色がついてゐる。関ヶ原の合戦についてはよく知られてゐるので今さら書くまでもないが、私は中学校の郷研時代関ヶ原の合戦に出陣して武将の紋と現在の住民の家紋との関連性について調べたことがある。調べたといつても先生が専門にやつておられたのを手伝つた程度である。それをもとめたものが本になつて出てゐると思ふが、あまりよく覚えてゐないの

又、現在の不破の関跡には芭蕉の句碑がある。

「秋風ややぶもはにけも不破の関」

私が初めてたぐ本を見たとき、たのがこの句碑である。だからたぐ本を見たとつてもこの俳句を思い出すのである。この辺は現在荒れほうだいで昔のままである。一度このあたりの観光化の話が持ち上つたことがあるが、いつのまにか消えてしまつた。やはり、このままにと残しておいて欲しいものである。

時代が前後してしまつたが縄文遺跡について少しふれておくことにする。

現在の関ヶ原町中野には以前から縄文式土器が時々発見されてゐた。しかし、発掘する人もなくほおつてあつた。ところが名神高速道路がちょうどそこを通ることになり急に大がかりな発掘が始まつたのである。ちょうど私が中学生の時、クラブの関係上発掘を手伝つた。片手で持てる位の小さなほうきで柱の穴の跡や火の跡の上にかぶつてゐる土を注意

深く少しづつ取り除いていくのである。
根元のいる仕事である。穴が、だんだん跡
が表われてくると胸が高鳴ったものである。
発掘が始まると二三日のうちに掘り
出された土器や石器などは夜のうちに盗
まれることもあって、あまりいろいろな
ものは出なかつたようである。私は手伝
つたお礼に土器のかけらをもつた。た
いへんうれしくてその時は箱に入れてし
まつておいた。今でもあると思うが、見
た人へは私に言つて下さい無料で見せて
あげます。つまらない話になつてしまつ
たが、とにかく発掘の楽しさというものは
自分で直接やつてみなければわからない
だろう。大学に在る間にもう一度あの
ような発掘をやりたい。

私がふるさとを思い出す時、同時に思
ひ出さぬものがある。それは伝説である。
伝説は我々の祖先の思想、感情、信仰、
風俗習慣から生まれたものであり、その

ころに池がある。ちやうどそのそばを伊
勢街道が通っている。関ヶ原の戦いの時
には本田忠勝が陣をしいていた。この池に
は古くから大蛇の伝説が残っている。

昔、この池に住んでいた大蛇が、毎夜
美しい娘に姿をかえ、使節をもぎながら
町を歩いた。時には民家をたずねてわん
を借りた。そのわんがたいへん生臭く、
魚のうろこなどがついていてるので、怪し
んだ人が次に貸すときわんの糸を針を
さしておいた。鉄は大地の最もきつもの
なので、それ以後は二度と娘の姿は見
られなくなったという。今も十ヶ池に
は、桑名方面に向けて古い抜け穴がある
といわれている。小なり時、祖父よりこ
の話を聞かされて、あの池で泳ぐとき大
蛇が足をひびき、必死におぼれて大蛇のえ
いまになると言われ、我々はその話を
信じていたわけではなかったが、なぜか
その池で泳ぐことは決して泳がなかった。

時代を穿し出す珠玉鏡であらう。その珠玉鏡
に写つた姿を少し紹介しよう。
〔日本武尊と清水〕

日本武尊がえん征伐の帰途、賊を平らげ
うと伊吹山に向かぬれたとき、中腹のあたり
で白いのしに会合ぬれたが、まさか賊が
姿をかえたとは思わず、そのまま登つていか
れた。すると今度は太きなひょうが降つてき
た。このため身は体はさんざんたきつけろ
れ、氣を失つてしまぬれた。お供の人が心配
して背負つて山を下り、玉倉郡の清水をすく
つてさしあげると、正氣にかえられた。それ
からこの清水は居宿(りきめ)の清水とよぶ
ようになった。た、この清水については、関ヶ原
玉の清水、垂井の清水、滋賀県の醒ヶ井の清
水だと、おのゝの土地の人が主張しあつ
ている。ここでも民衆の土地に対する一面が
表われていゝのではないだろうか。
〔十九女池(ノブライケ)〕

関ヶ原町のそばから少し南東にはずれたと

まだいろいろおもしろい話があるが、それは
次にゆずるミレにする。

現在関ヶ原は観光の町として発展しようとし
ているが、どうももう一歩発展しないよう
である。原因はいろいろあると思うが、二、三
あげてみると、近くに大都市がない、若い人の
興味をひくようなものがない、関ヶ原の住民
があまり観光化に積極的でない、などがあげ
られると思う。私としては、観光の町として
の関ヶ原より静かた落ち着いたふるさとであ
つて欲しい。故郷の発展を望む心は、今も
のままにしておいて欲しいと思ふのは私の心
がままであらうが、なぜかふるさとをふと思
い出すものがある。

※参考資料

「不破郡史」
「不破のあゆみ」



柴田哲雄

今回に限り私の文章を籤せることによ
つて中味の濃い、有意義のある機關紙の
のすにるじすしになつてくれ

前書でした。

序

今回は少し思考を変えて、「人間」について自分の思っていること、考えていることを少し述べようではないか。

「人間」を述べるといってもこれは非常にむずかしく、一概にこうだといえるものではない。また見方角度によっても非常に誤差が生じてくる。これを社会学から見ると、言語や技術も媒介として、宗教的に、政治的に、経済的に、もういっちょおまけに道德的に考え前進して行く、となるんだそうだが、私は人間の心の中にある方を、重点において考えて見ようではないか。ミナ思考には、かなり自己的になりやすいと思うが、そこは、足し

う利己主義に陥る。しかし、何の心配もなく世の中を送るゝことができる。言い換へれば単純な人間である。僕もどっちかという、むしろ、単純な人間であるのでここで轉換をこゝと割つてゐるのであるのだよ。しかし、反対に「他人」が最大な割合を示めたりこれは、その人の、最大の危機に陥ると思ふ。「自己」を完全に忘れるとその人はもはや一有機体として人間をコントロールできなくなる。結局のところ、言いたいのは自己を堅持すれば、そして、自己の側から見た他人を持つてばそれはすばらしい人間ではなからうか。この精進を持って生きてゆけば、何の争いも起ることはあり得ないだろう。いや起るはずがない。何かが起った場合、自己側から他人を見るというのは言葉を交えて言うところ「和解」を意味するのであり、自己というのは「発展」を意味せざるを得ないことになる。「和解」

からず。なぜ性的にみれば、これは、異性を
受け入れ、そして技術を使つて……（ここ
まで言うとは編集委員長にカットされるからヤ
ーメタ。）……するのが人間のもつ唯一の特権
じゃないの。あとは読者のご想像に――。

第一章 人間の本質について

人の心の中には「自己」と「他人」とが共存している。一般に言う他人とは、自分自身を除いたすべての人（但し、結縁者は除く）と定義づけられる。前者の「他人」と後者の「他人」とは、いわゆるバック、グラウンドが違っているのだよ。と僕は考えるんだ。そして「自己」と「他人」と、均衡を保て、それぞれ理想的な人間へと進歩していくのである。しかし、そういうような人は少ない。いやほとんどいないといってもよい。大部分の人はどちらかに寄っている。たとえば「自己」か「他人」よりも多大な割り合いを示せば、樂觀的な人間へと、すなわち、自分さえよければよい

と「発展」こそ人類の最大の願ひではなからうか。大事なことは、自己を忘れるなということであるが、こういつても本人は自己をあまりにも大切にすぎたためやや客観的にはつてゐるが、これをいかにして乗りこえるかというを、それは、オーに他人との接触である。人間は一人に閉じこもつてはいけな
又、考えることもよい。しかし、そればかりをこつと必然的に自己を忘却し、しいては自分自身が不幸な状態に陥るのである。ここでもう一つ言いたいのは環境に従うということである。その状態にいれればその状態に合ふふんいきを作り上げることである。このことを頭においていかないと、自然に孤独に陥るのではなからうか。又、パチンコ・マージャン・映画の三樂も世を渡るべき一つの方法である。この考えには多少不満をもたれる方があつたが、憤然してもいつてよいノーコメント。これは自分だけしか説明しがたいまわめて困難な命題であるから……。しかし、このよ

うは考え方も皆さんの頭に入れておかれ
ればきつといつか役に立つと思う。
第二章 人間とクラブについて

では話題を変えて——現在のクラブの
ナゴヤカムードは、それは一面から見れ
ば非常にいいことであるが、これは前に
述べた人間が「自己」の割合を多大に示
めた状態、即ち何も考えなくてもやっ
ていけるために樂觀的なものに陥ると
いうことである。今、クラブ全体という
ものを二有機体としての人間とみなせば
前に述べたとおりであるように「自己」
と他人との均衡の状態にあれば理想的な
クラブになりやしないだろうか。すな
わち、自己側から見た他人と持てとい
うことである——。ではクラブが自己側か
見た他人と持つということはいったいど
ういうことなのか？それを解明しよう。

題なし

——池田金——

後然なるままに、頭の中を巡らした事を
文意不明のままに託したものです。

(實際は締切りの一週間後の日曜の夜に
無理に考えにもの——あしからず。)

「人の足の小指には赤い糸が結ばれて
いて、一組の男女がつながれている。人
は結果的には、その運命の赤い糸に支配
されて結ばれるのだ」——太宰治。へち
ま、と違、たかな？まあトリビアルな事
で文句を言わない事し

あなたには恋した事がありますか？人は
なぜ、人を愛するのでしょうか？

恋する女性はいそいそと多かれ少なし
彼に生きる人は強いとも言われます。し
かし、人を愛するとは、人の持つ潜在
的支配意識・占有意識の発現ではないの
かと思われ、事があります。それは自分
表面的には、その相手のための行為で

それは一面から見れば他リクラブとの比較で
ある。それを少しづつ考えていって、なにより
よいクラブ形成を維持できるものであろう。人
間何れも比較、あるいは基準がなければやり
がいがないと思う。そして基準の上へ上へと
進んで行くのが発展ではなからうか。今日の
クラブの状態には基準がないと思う。故に発
展しないことになると思う。つまり、人間一人
一人が一つの目的を持ってクラブ活動を行
えば、しいてはクラブ全体が一つの目的をもち
発展できるのではないか。これはかなりやっ
ていると、他人へと進んでいくから、そこ
に合ハイなほど実地踏査等も行つて楽しめ入
れていけば「自己」と「他人」の均衡が保た
れることになりやしないだろうか。かなり自
己的意見になつてしまつたが、い、私が我
の意見としておこつ。いや、積極的には、よりよ
うな意見になるのでは無いでしょうか。
では失礼——。

ありましようが内在的には相手でも自己の中
に同調させての自己そのものであり、最高位の
の自己(エゴ)ではないかと。つまり「愛」と
いう名を与えた自己満足(自己欺瞞)ではな
いかと。

あなたは何故、女の人と話したく、女の
人を知りたく思い、最後には結婚するのです
か？……考えてみるのもおもしろいと思いま
す。——結論なんて出す必要はありませんよ。
社会は娯楽の産物だから、……(陰の声・お前
はどうなんだ)——いやあ、どうもあつませ
ん、自分の事を言わねえ。私の容・小かり
ません、いって言えば、何となく。

あなたには外界のもの(人間を含めてすべて
のもの)を見ると考えてますか、それとも、
人をも含めた万物から、見られていると思ひ
ますか？ すべてを見るという人には、自分
の回りのものはすべて、単に存在しているに
すぎません。彼には、物理的視野にはいるで
しょうが、彼の由に見ると言う意識を、つま

主体的動作のないかぎり、何も見えな
いのと同じです。

ところで現代の人は見ると言っても一
部だけで本質的はずべてから見られてい
るという感情を持つてゐるのではないで
しょうか。自分の行為は相手にとつてど
う思われろかを行動する前に考えてしま
うのです。自己をみつめる―自己認識―
も他の人を通して、社会を通して行な
われてゐるのです。いや、他トを通して
しか現今では行なえないのかもしれませ
ん。ジャーナリスティックに言へば他人
志向でしょう。そこに現代の孤独が存在
するものと思われれます。人は山野に
いるときよりも街にいる時の方が孤独な
のです。人は大衆の中にいる時が一番孤独
なのです。自分とは無関連に存在し、肩と
肩をふれあつてゐる。こんな不安な状態
の時に痛切に感じるのです―孤独さ。
そこで人々は、そこから解放されん事を

願ひた人の話を聞く事も、自分が経験し
て教へる事が出来ないうから。

又、自殺は一般に現実の自己に自信が持
てぬため行なわれろと思われしています。
自殺は「自ら死ぬし」ではなく皆「自ら
殺す」と―自分自身への殺意で実現
させることです。自殺が軟弱になつて死
本能に包まれてしまふ人は有機物から、
元の無機物へ帰らうとする傾向に致る。
そこで死に還えし生物的要因に達するの
です。自殺の過程には傾向、動機、論理
実行の各段階がある。まず彼は自己破壊
あるいは死への漠然とした欲求が起つて
くる。そのスクターは個人的なものとし
社会的なものがあります。個人的スクター
としては、健康、家庭事情、恋愛、仕事
学業等々……社会的スクターは人間関係
の重圧や自己の社会価値の崩壊等々……が
あげられます。そこで世間の人は自殺者
と現実よりの逃避、敗者―と呼ぶでし

願つて、容易に、意識的に自分を限定してし
まおうと、しかしそれは単に逃避にすぎない
のではないのでしょうか。孤独が恐しいのはそ
の条件によつてです。その観念のプロセスに
よつてです。孤独は愛するものではないでし
ょうか。物が夏に表現的なものとして人に迫
るのには孤独においてでしよう。そこにおいて
無力なる自分も明確に認識出来るでしよう。
「この虚無の空間の永遠の沈黙は私を……」
セド・レーバスカル

孤独が恐しいのは孤独そのものではなく、ま
しろ孤独の条件によつてである。同様に死も
その条件によつて恐ろしいのである。
あなには死を考えた事がありますか？ たれ
でも死は恐ろしいものと思つてゐるでし
ょう。それは、死の観念的なところから
しよう。自己の非存在たる世界を想定する
からです。だから、見方を変えろと死は唯一の
平和であるかもしれせん、この真実は生命
を持つてゐる或々にはわかりません、實際、経

よう。そして、「もう少し努力すればよかった
のに」と。しかし、私は彼は敗者とは思は
ないのです。彼はその時点における彼自身を永
久に残したので。彼はそれ以上はすすめま
せん。同時にそれ以上悪くはなりません。彼
は自分の重荷から逃げ出したのではありませ
ん。彼はその重荷を背負う事実を認めたので
あり自分自身を、自殺は逃避の手段ではな
いのです。その時点の自分の責任を全て負え
る人のみ行ふべきものです。――もうネムク
頭がモウロウとして来ました。ここいらで打
切り――。

人は作品より作者を知つたと思つてゐる。
しかし表面に出されたものは或るプリズムを
通つており、又化石に等しいものだ。しかし
社会はその化石で構成されてあり、人はその
中でうごめいてゐる。人はその化石を必死に
抱えてゐる。ただそれだけ。

註① 逸作――無教ゆえにちいさなものを
② 理解できない所―勝手に想像して結構。

『さけぶ』

伴金美

いっきりさけぶのは氣持のいいもの
原始時代には、さけぶことは、通信の
静かであつたから、さぞかし遠くへ
た事であろう。もつとも、今の時代
にうと声をばりあげれば、せいぜい
「犯罪法」にひつかかるか、「精神病
行きがおちであらう。とにかく、お
ちと、声を出すこともできない世の
なりつつある。もつとも、機会は、
まだあるかもしれぬ。デモのシ
ヒコール、応援、山に登つた時、夜
を散歩する時など。とにかくさけ
ぶには何も残らない。

なぜ さけぶのか。王様の耳はロバの身
と穴に向つてさけんだ床屋がある。『も
の言はぬは腹ふくる業なり』と名言を吐い
た法師もいる。悩みをうちあけて、胸がす
としたという。しばしば身にする。し
かし、さけびには内容がない。せいぜい『バ
ッキャロー』が、関の山である。床屋にして
も、法師にしても、別に内容はないといえ
ない。要するに、それは心のわだかまりを、
言葉に現わしたにすぎないかもしれぬ。し
かしさけびには、何か別物がふくまれてい
る。やうな気がする。夜の海辺を散歩する
ついで海に向つて、『バッカキャロー』とさ
けんだ人は、ひとりだけではないだらう。と
にかくその後で、心は『すーう』といい気分
になる。しかし、バッカキャローには、別段な
んの意味もない。さけぶべき理由も、おろ
く見つからないであらう。

『現代の複雑な社会に於いては、たえず自
己を省みる時など。とにかくさけぶには何も残らない。』

ない。

しかし、さけぶということを潜在意識で、
すべてかたづけしてしまふには、なにか心のこ
りがする。

「人間は言葉なんぞむずかしいものを、い
つとも、もてあそんでゐるから、時には、『ア
ン』とか、『ウーン』だと言つてみたくなる時
もあるさ。だいたい言葉なんかならべていて
はだめな時がよくあるぢやないか」と。し
かしこれも、潜在意識を、川の面から言つた
にすぎない。人間のする意味のない事は、す
べて潜在意識の賜物なのであらうか。もつと
も「潜在意識」なんていう言葉は、『本能』
と同じで、カゼ薬みたいなものだから、あま
り信用のおけるものではない。しかし、
なぜか知らなければ、つれしいぢや、悲
しいにつけ、声をかぎりになんて、たくは
るものだ。

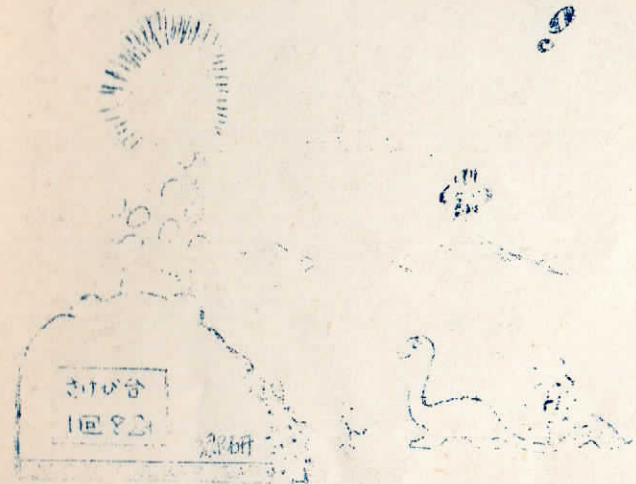
近ごろ、デモのシヤアレヒコールやジ演

おさえてつけないければならぬか
なにかのはずみにそれがまとめて出
たものである。』と説明されると、
ほどうだ。しかし、人間はそれほ
この抑制に対して、そのようにな
『』という行為で、簡単に補償でき
るうか。おそろくそれでは、なんの
ためともならないであらう。
いや、それは、さけんだ後のすが
さなんでものは、一時期のものであ
る。他の自分もなごさめる手段にして
も、これと大同小異だ。』というかも
ない。しかし、話を元にもどして、
けぶ』という行為はさけんだ後のす
がしさを求めるための』と聞きたい
いや、さけぶという行為にしたとこ
ろからだと動かしにくくなる時と同じ
衝動的であればあるほど、潜在意識
路は明白さ』と、言われるかもしれ

説書に、マイクがだいぶ出まわってき
。しかしこうなると、さけぶという妙味
は、味もそっけもないものとなる。だい
たい、マイクからでるのは自分の声では
ない。機械の音なんぞ聞けたものではな
い。

さけぶ。

END



杉浦秀敏作品集より
作品二題

杉浦秀敏

無 (一)

「金」「金」「金」：尊いもの、大切なもの。ほしいもの。ふやしたいもの。わずらわしいもの。いらぬもの。……人はそれぞれこのものに対して色々な考えを持つてゐる。そしてこのものは人に夢を与える。また悲しみも。人は多量のものを手にしたときのことを夢みる、あめしう、こうしうと。取らぬにぬきの皮算用である。いやなんです。たぬきにはかされるなんて。いやなんです。取らぬたぬきを夢みるなんて。……と言いたくなる。そしてこんなものほど人間性を失

るものはない。人はこれを求めてあくせ
くする。そしてこのものの前に頭をさげ
る。人間に対してではなく。おれは言い
たい。なんだこんなもの。たかが紙切
れ一枚、金属板の一片ではないか。トイ
レットペーパーの紙、フライパンの鉄板
のほうか。大きくもあり、役にたつでは
ないか。こんなものは風呂のたきつけに
もならないではないか。



「こんなぬき紙切れが人間を支配するなん
て……それならおれは、たにみ十枚ぐらいのト
イレットペーパーで 人間を支配してやる」

END

無 (二)

人間、動物である人間。すばらしい動物で
ある人間。人を愛することの喜びを感じて
される喜びを感じうる人間。世の中を
ようという人間。色々な物を発明して
さ楽にしようとする人間。暮しを楽しく
りあいのある生活をするために色々な芸術を
生み出す人間。人間には「知性」がある。物
を考へ出す「知性」がある。人間、なんとす
ばらしい動物であろう。だ

だが、人間には「欲」というものがある。

ボフには必要なんだなあー。ねエ、ボフと同じ気持ちでいる君、共に語り合おうよ。ねエ、しっかり者のあなた、ボフ達の話し相手になって下さいな。(68.10)

近所の娘さんが、お見合いをしました。相手の男性とおしゃべりをしたり。ただその縁談は、うまくいかなかったそうです。というのは、相手の男性がコーヒーを飲む時に、スプーンを使って飲んだから、という飛べ娘さんの方がその縁談を断ってしまったそうです。あなた、あなたにだってらどうですか？やっぱり、スプーンでコーヒーを飲む常識、知らずの「田舎者」はいやですかね。(68.10)

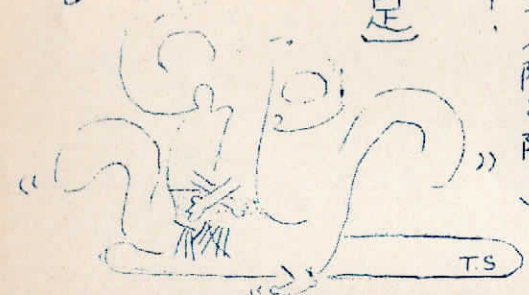
ささやかな質問
南ア共和国へ行くと、全て「白人用」と「黒人用」に分かれてるそうです。

ささやかな疑問
朝日新聞が朝刊にこんな記事がのっていました。アポロ計画に反感49%、と。いい金の使い方を「エム」アメリカでおこなわれを世論調査でアポロ宇宙計画に反対のアメリカ人の方(49%)が、賛成派(39%)より多かったんだそうです。ボクも、最近「宇宙開発」について、手離しで喜んではいられない、と感じていたので、この記事は、ボクにとって、うれしかった。その記事によると、賛成の少数派は、重要な科学的発見が期待できるとのこと。米国が宇宙競争でソ連をリードしなければならぬことをあげている。そうだがボクは、宇宙のことについては、全くの門外漢だからわからないのですが、いったい月や他の天体を探検しなければならぬという理由はあるんですか。少くとも、戦争、飢饉の絶

へバスからトイレまで全て」で、もしあなたが、南ア共和国へ行つた場合、バスに乗りたり、待合室で待ったりするのには、「白人用」「黒人用」どちらのをご利用なさいますか。(69.1)

土曜日

日本史休講。エイガでも見に行っちゃおう。マラー・サド・ビバマリア。前者は、革命の陣痛、後者は革命の誕生(陰と陽)の帰途、本屋の店先で、
「ゲバラ日記」を立ち読みす。革命か。だけど、日本では、今、警察が必要以上に増大してきつつあるから、革命どころかデモストレーションも自由にやれなくなるのでは？(69.1)



〔蛇足〕

えない現代において。いやこれは米国に限ったことではありません、ソ連だって同じです。人類平和のために、もっといい金の使い方があるのではないのでしょうか。どこの国でも、せめて人工衛星だけでも、くらいは「や」か「ぱ」を打ち上げているようですが、なかなかうまくいかないようです。あなた、あなたは「宇宙開発」について、どのような意見をお持ちですか。お聞かせ下さいな。(69.2)

ささやかなときめき
十代もあとわずか。キスがしてみたいんだけれど。

ささやかなゴマスリノ

先輩ノ御卒業おめでとございます。

FIN

東若狭を旅して

—寺本忠司—

文章にする題材が貧弱であるし、またそれを見に出す文才もないので、とりとめのない旅行記を書くことにする。ここの夏、クラス仲間の人で若狭湾の一部(東部)を旅行(キャンプ旅行)というべきだろうか)したことを書くように思う。

ここの春頃から夏にかけて合宿でもして、いろいろと話し合おうという意見が出、いろいろ候補地があがった。はじめは、伊比川上流のキャンプ場でも買いためて、それでもって読書会でもしようかという意見も出たが、一度くらは日本海を見たいというやつも出てきて、初めの計画とは違つてキャンプして歩き回ろうということになった、そこで場所は一番近い北陸の入口敦賀から

だが、それよりも、芭蕉で有名な色ヶ浜へ行くことになる。

松原海岸から色ヶ浜へ船で行く。後方にあるのを見やりながら、上船中、地元の人と話しを交えながら、この辺の海では、何という魚がとれるかとかがう話が出、また、ここまで来たのなら、岬まで行つた方がいいという話を聞き、我々は動揺する。ここまで来たのなら、語り草に、あまり知られていない立石岬まで行くということに決めた。(いろいろ気の変わる連中である。)そこで原野のある浦底で降り、立石岬の部落まで歩く。途中たきぎになるのを集めながら……

……この辺は、全くひなびた漁村で、文明社会から離れたような気がする。適当なところでキャンプをせよ。(当然文明から離れた、部落から離れたところである)食事にとりかかる。食事にとりかかる段になつていっつも問題なのは水と

地獄の東部ということに決まった。奥の休所に入つて早々の7月12日から16日になった。

まず、お一日目に名古屋駅に、重いリュックとテントを持って集合(集合するのは4時であるが)、乗り込み、金車。まずここまでは快調。一人は名古屋駅で集合するはずだが、岐阜駅で出会う。もう一人は、途中で下車する。東海道線をつっぱしる。米原駅で大号に乗り換えるため、米原でも見ようと思つて途中下車したが、米原には何もなく、本に交通駅のため町のように思われた。

敦賀に着く。まず駅前通りを歩き、気持を横目で見て過ぎ、松原海岸に行く。それは、国有林の松林でかまされ、キャンプ場として有名である。そして、大阪、京都からついている名古屋からの海水浴場に最近盛んになつていける。まず日本海の海で泳ぐ、海は、深い、だが名古屋の海と違って透き通つてきれいだ。ここはキャンプをしようと思

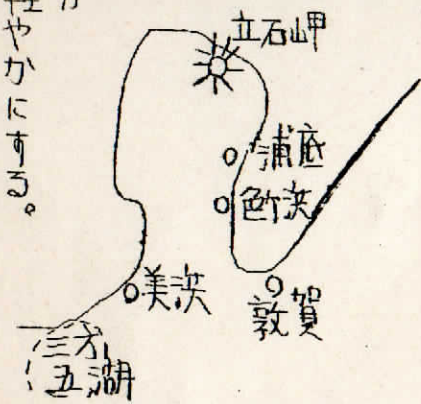
たきぎである。たきぎはあつて拾えば事足りるが、水はとうはいかない。あたりに水はなく、井戸もない。あるのは前に広がっている海の水である。それは飲むわけにいらず、一キロも離れた水道のところを、ポリンを持ちながら、とぼとぼと往復する。部の人口には水は貴重なものらしく、我々も使つていけるよりも大事に使つていけるように、部落の人々には目にあまる使い方をしているようだ。食事の献立は、カレーに似たゴタモノである。食事を食べるころには日もくれカマドを囲んで食事をやる。みんなの顔が黒線に見える。終わると、ミーティングになるが、話題は打ち明け話から、哲學、非ユークリッド幾何にいたるまで、オールラウンドで、話はずきない。寝る段になつて、続く。仲々寝れない、寝れないと言いつた徹夜になつてしまった。寝れなかつた原因はキャンプである。場所なムード、蚊という大敵と、奪取したければ足りないこと、そして……

大きな原田は、昼、泳いでからシャワー代を浮かそうとして、シャワーを浴びながら、たこからくる体がむせることであつたと思う。

ある日、出発する前に立石岬の燈台を見に行く。立石燈台は無人燈台であつて、そこから若狭湾の西瀬海岸を一望することができる。

立石岬までは、高台のところにあるため道は急で、歩きにくい。しかし、朝のすがすがしい朝風が肌をなで、心軽やかにする。

また、途中には黄色とか、ピンクの花とどこどこに咲いている。また人気がなく、我々だけの世界のような。皆さ（立石岬一帯）に来てよかったと心の中



で感じたことであろう。だが、これで終りではない。旅の果しを、著しはこれからである。

そこを出発して、半島の西海岸に沿って美浜まで行くつもりである。起伏の激しい道を通る時間ばかり多くと、道がなくなつた。あたりのたんぼ（段々型）には水が流れ、その水は、下へ下へ落ちて行く。小屋は一つあつたが、中には人もいない、家も無い。この辺は出作りのようである。ここは敦賀から十数キロの地点であるが、こんなに近いのにこのようないところがあるとは意外だつた。聞く人もなく、その上その地図を、寄りにも寄つてその地図だけを持てなかつたのである。あたりをさまよう。しかにがないのでもどろろこになった。全くの跡取りである。敦賀に出て、六車で美浜まで行く、美浜の松原海岸でキャンピングをやる。余りにも冗長になつたので、後の行程は略する。

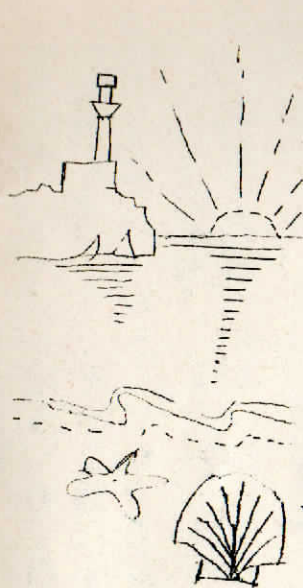
3日目、三才五湖めぐり、4日目、梅状

ふるさとを愛する男

—高木義明—

今までの行路に想ひをはなれよう。このキャンピング旅行は想ひ出多し、印象の深いものであつた。たゞ思う。たゞ充実にていたというのではない。反省すべき点はいろいろある。たとえば計画が全くなされなかつたこと。

このようにこの旅行記を書きつづけてまた、読者のみなさんにはつきりないものもあるだろうが、私は、たゞこんな旅行だつたのだなあと、後にふりがえつて、自分自身に自己満足を与えるためだけに書きつづけたのかもしれない。



故郷を離れて生活していると、改めて「ふるさと」というものを考えるようになる。郷土愛というものであろうか、心の中に誰でもあるであろう。特に、いわゆる「いなか」に住んでいる人達は郷土意識が強いのではないだろうか。我々は偶然にそこで生まれ、そこで育つた。そこには何の必然性もないのである。しかし、我々はその偶然性を帯びた郷土をたいへん愛する。我々はその郷土に何の貢献もしていないのに郷土を誇る。我々は郷土に有名な名所・史跡があると、それかまうて自分のものであるかのように誇るのである。私の場合小学校で初めて歴史を習つた時、教科書に「関ヶ原の戦い」が出てきた。その時、なぜかうれしかった。昔、自分の現在住んでいるこの土地で教科書に載る位大きな戦いがおこなわれたのだと思うとたいへんうれしい

たそがれ

平野善致

人間にとつては何が必要なのであらうか。必要であるというよりも個人にとつてどんな要素が一番本人にとつて満足であるものなのであらうか。人生とは絶えず求めの連続である。求めるものが多量であらうか、知識であらうか、愛情であらうか。人生における幸福の一つとして相互の信頼感なるものがある。相互の信頼感をして自分自身に対する信頼感と謙虚なる自信を人がこの孤独な立場において感じとることができたらどんなにいいであらうか。

人が言う、現在の社会状況において
 も大切なことは、物事に感動する
 心、物事を愛する心であると、人間のパ
 ーソナリティを計る基準として知・情・
 意なる三つの要素がある、人間のもつ
 人間らしき要素としては「考える力」

これはないので。

人に対しては、個人にとつても重要なものである。自分の環境の升を考へ、自分の目的を追い求めて自分の意見を主張する人間に、本当の心からの信頼感をもてるであらうか。もちろんこのような意見に対しては、価値感の違う人から見ればたゞいふなり考へのように思われるであらう。価値感の違いはあつても、この機械文明の中において、もっとも人間の間近しきものを尊重することに変わりはないであらう。とかく最近の人間は考へることが多い。考へる能力をたないといふのは、ものである。それをもっともではあるが、はた物事を愛する心も考へる力と同様に、失つて行つたものである。

終り

あなうち「知るか」「愛する心」すなわち「情」なる二大支柱があるのである。

人間のものとものにない姿・万物のものとものに
あはれむべき姿としては「情」なるものの欠け
た「考える能力」しかもない人間ではない
のだろうか、もちろんここで考えるといつた
のは狭い意味での「考える」ということであ
る、考えることしかできない人間は「生きに
人間とはいえないのである、ある人がたずね
る「自由」という言葉から何を思ふ」、すると
たずねられたもう一人の人がいう「たずねられ
るときに一人で窓の外を見ていると何も感じる
か」と。あの薄暗い夜をかれどき、どこから
ともなく四方八方から青色をした照明がこの
大地を照らし出ているにぞかれどき、見なれた
隣の家々の屋根までもが平時とちがったもの
さびしさを感じだすわけである、没す
るものの哀愁を感じだすわけであるのである。
それでは「考える」ということの重要性はど
こにあるのだろうか、この場合学問的・思
想的・政治的なものが重要ではないといつてい

御土研宄会に入る時の勅機

鈴木眞吾

大學にはい、たら何かクラブにはいろうか
と思つていたが、なかなか思うようなもの
がなく六月になつてしまつていふ。その頃、ほ
くは同じ高校（豊橋東）からこの学校へ同級
生でほぼぬれもゐなかつたので、友達がいなかつ
た。だから友達を見つけるためにもクラブへ
はいらうと思つた。

卒直にいつて、同じクラスの人へもうみなさ

んにはおわかりの人と思うが、郷土研究会
 に入会して、すくなく研究などをしてい
 るを見て、ううやましく思い、仲間にい
 れてもうかうとして現在のクラブにはい
 入らなかつた。このクラブは運動クラブ
 であつた。高校の時まではクラブは運動
 クラブであつた。このクラブにはい
 る時はいふまでもなく、このクラブに
 入つてゐるが心配であつた。

我所の祭

——鈴木貞吾——

大嘗にはいつて郷土研究会にばいままで自分の所の祭りなどにあまり興味を持たないが、たが、研究を続けよう行くうちにへ更にはあまりしていいが、ふと、それを調べてみようと思つた。

三谷祭は第一三代東山天皇の頃から始まつた。そのころ三谷村の庄屋に佐左衛門という人がいた。その人が元祿九年八月のある夜に、八劍様（現在八劍神社がある）が神璽にのつて若宮へ参御するのを夢見たのである。そこでこれは神様のおつげである、と、早速、神璽御の儀を行はつたのがそもそもの始まりであるといわれている。それから徐々に種々の「よきさうし」を行い、山車を引き出すようにになり、にぎやかになつてきたのである。しかし、いわゆる工業化・産業化の波におかれ、海岸一帯が埋め立てられ

れてもまつたので、この祭りの見どころである山車などが御参りの途中、海岸の砂浜の土を通り、それから海中に引き入れ、十月の寒中を裸で首まで海水につかつて船まで出してする行事も行なわれなくなつてしまつた。砂浜は埋立てられ、その上に舗装道路ができしまい、動きにくい砂の上を「えんやうや」と勢いよく引いていくのが今ではかんたんにコロコロと動くようになつてしまつた。この砂の上を渡り、海中にはいるところが三谷祭の一番の特徴であつたのだが……。また、町（こ）といつておくが、大都市蒲郡市の中の大都市だ。の人口は増えているにもかかわらず、祭りの行事に参加する人は年々減つていく。これは、この行事をする原動力たる青年も若年層のみに求めているから、学校への進路が限られた昨今では学生の数がふえ、若年層が減少したのも原因である。更には、私も祭りに見物はいつもしているが、その行事に参加したいことは一度もないのである。このように町が發展するにつれて、

昔からのものが衰えてゆくことはよく言われるとおりである。なせ衰えていくのだから……。。

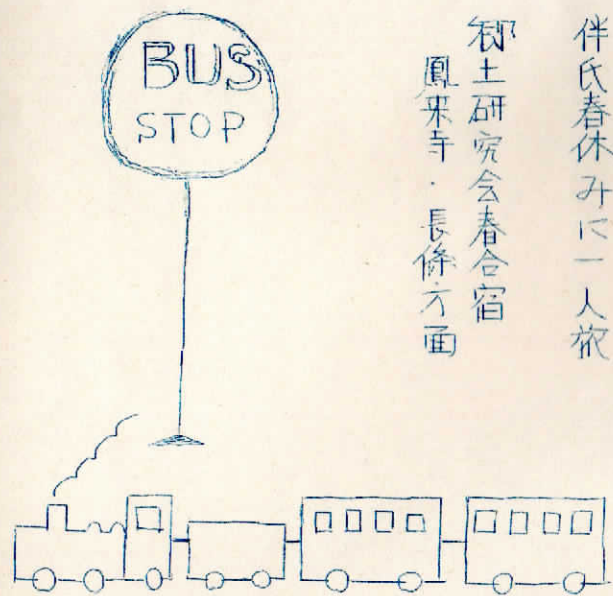
「いふ以前」近くの丘に古墳が見え、これとかがあつた。ぼくは小学校六年生の時にそれを発見したことがあるが、あまり大きなものではなかつた。この古墳の丘も、新緑線の工事が始まると、土はけずられていつて半分以上もなくなつてしまつた。我々の周囲を見回してみろと、このようばことばと行なわれてゐる。ぼくは、今、郷研名古屋班で、清須越がらの名古屋の発展について調べているが、名古屋において、祭りやその他古くからの由緒ある物などは、商業宣伝にのつたものの以半はすたれていき、人々の心からも離れていつてしまふのではなからうか。

ページがあまつたのでちよつとニミース。柴田・水野・杉浦・鈴木氏四名はこの春休みには自動車免許を取るとかで自動車学校へ入学。はたして、何回でパスするでしようか。

伴氏春休みに一人旅

郷土研究会春合宿

鳳来寺・長條方面



最後に、三谷祭は10月にあるから見た

人はどうぞ来て下さい。

『題無し』

永野 徹

し書くことが無いので、僕の初夢を書き
と想います。とは云つても話しかおもしろ
いわけでもなんでも無い、おまけに、夢
自の支離滅裂さとりつたら、この上もな
い人物といえは、ただ一人、クリスマス
の夜から正月にかけて、毎夜酔いつぶ
っていたかの様に見える、ルンペン図の男
のものはバサバサ、酒と脂がこつてりと
みつた顔、髪は高く、不揃いの
けり中にうもれてゐる、厚唇。なに
う夢のことであるから、いつ夢に現わ
れたのか、一向に記憶になら。夢の終、と
正にこの事だ。彼はなにかボリットをこ
くり始めた。すぐに、彼は聲をかみ紙を、
こぼしてゐるのだと、分つた。もちろん彼
は、それに適した、やわらかい紙など持っ
てゐるはずもなかつた。彼は勉めたように

げん的とは、いかなることであらう。むし
ろ、わーんげん的であるとはいかなること
とか？リトはいかに生々々か？と、
に考えること自体が、わーんげん的という
ことの最良、ではなかつたか。バスカル
は「人間は考えるアミである」という。考
ることをしなれば、人はアミとならん果
ならぬのである。ところうかどうであら
う、今日トは、君えんことをやめてしま
つたかの如く思われる。『考える』を失
つてしまつたかの如く思われる。そして、
この問題を自分の内に取りこもうとしな
い。考える前に、小手先の技術でもって、
考へてしまふ。そして、その為につく
る。諸々の問題に對して、近視眼的利害での
論じらるゝである。自分で自分の首をしめ
てゐるのだし、いうことに似合ふなりであ
る。いつたり何か原因であらう。先に極度
に精神化された身と書いたが、巨大化し

胸のボリットから、ゴロゴロした紙を取り出
した。彼は確があるかの如くに、その紙を広
げた。それには下手な序で何か書いてあつた。
それは彼の書いたものらしかつたが、彼は、
パンと鼻で笑うと、それで鼻をかもうとした。
しかし彼は、一時ためらうと、それを讀みは
じめた。この紙を使う前、一つの義務である
かりゆきに、あの夢ばうい指有り、ちぢけた
鮮な読み紙である。その内容はなにしろ夢で
あるのだ、はつきりとは、わからぬが、次
の紙であつたと思う。

『この極度に機械化した今日に於いて、わー
んげん的』であることは、リニギを三十個
むさぼり食つて、自分を企てることよりも、
はるかに困難であると思われる。遂にわーん
げん性が失なわれた為に、人類がこの地球に
現われて以来、かつてないほどに『思ひ』を
えるはずの、文明の利器が、いかに我々に、
肉体的にも、精神的にも、多大の害を身えて
ゐるかを知らぬことは容易である。ではわーん

技術革新は、人がすこしでも人らしく生きよ
うと努力した為に、今日のごとく発達したと
も思われる。しかし我々は、そこに技術面
のみの進歩を見ることのできる。一例を上げて
みよう。女房はボタンを押して御飯を炊き、
スイッチをひいて部屋を暖め、毒いり
を焚く真空掃除機でゴミを吸ひあげるかと
思うと、遠隔装置のマジックハンドでそれの
ラジオのイヤホンをはめ、さて自分は腰を
おちつけ、他などばやらかして、セリセト、
毒々しく塗りあげる。すると赤外線に赤外線
が来ると、自動開閉装置つきのドアがあく
で、自動きした拍子にマニキュアの板を、
ぶちまけてしまふ。しかし、いさゝかも動
ぜず、専売特許強力シミヌ液をふりかける
たちまち、シミは絶滅にとれるが、ついでに
絨毯まで壊れてしまふ。とこで腹を立てて、
火にも焼けず、酸にも侵されぬ新案スプリ

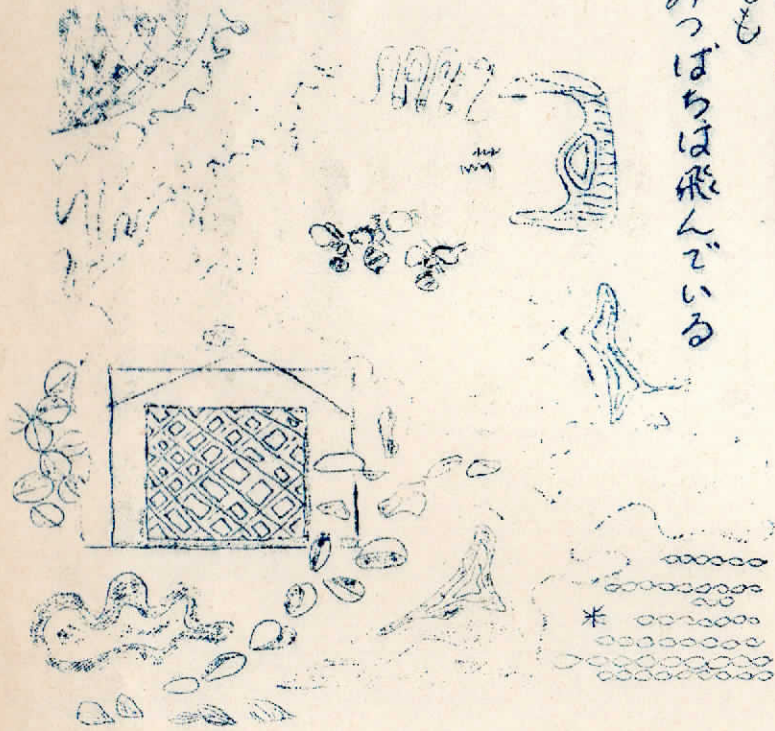
43年度主な行事一覧表

- 4月 8 入学式
13,26 新入生のためのフラグ説明会
27 新入生歓迎 コンパ (於・清風荘)
* 名大祭に向けての活動着々と...!
5月 1日 名大祭、"松平班" 実地踏査 (松平城へ)
3 新入生 歓迎 実地踏査 (小牧長手方面)
25 名大祭、"関が原班" 実地踏査 (関が原へ)
* 名大祭 近づきあわただしくなる。
このころ 文集"のすたるじす" 新入生歓迎号 完成!
6月 6日 名大祭 (1/2~1/4 合宿・於・徳伝寺)
9日 名大祭の郷土研究会の展示は女子評をハフす!!
(片山先輩来訪 -!)
16 県立大学との合同ハイキング (実地踏査と兼ねて) - 桶狭間 -
30 名大との合同ハイキング - 東山公園 -
7月 8日 夏休み前の合宿 (徳伝寺)
* 夏合宿のための計画、準備着々進む! (1/2~1/4 合宿)
18~19 夜行ハイフ (知多半島)
8月 25日 夏合宿の準備、食料品の調達
26 夏合宿 (信州 - 上田松代・長野・松本)
30 試験が近づいているためあまり活動できず。
9月 30 秋休み(8巻)を利用して奈良方面へ"学習の旅"
10月 7~9 新しいテーマ"名古屋"についての研究活動 具体的に開始
19 コンパ (於・伊勢荘) - 津坂・山岸両氏 珍しく参加せず!
11月 9日 県大祭 (1/2~2/4 名女大祭)
11 合宿 (徳伝寺) → 17 実地踏査 (古城めぐり)
16 合宿 (願成寺)
12月 6日 このころ 文集(機関紙)"のすたるじす" - 名大祭総括号 完成
* 名女大との合同ハイキングはらぬ合同ミーティング (1,2年参加)
8 県大との合同コンパ (於・霞島遊地の茶屋)
13 銀研研年忘れ大コンパ (清風荘)
24 実地踏査 (熱田神宮を中心に)
1月 18日 "のすたるじす" NO.5 完成
3月 * 追い出しコンパ (清風荘) 追われる人・津坂・山岸
8日 20~23 (予) 春合宿 (長狭方面)

花のない世界
吹かれ吹かれ
これ流され
巴のみつばちは
ただけになっちゃった
白の四角いセメントだけに
はりめぐらされた金網
遠くに水のない川の音
黒の太陽が下がっている
淡い影がたしかに動いている
みつばちの心はからっぽだ
どこにも苦しみはない。そして
見たことのない笑顔

伊藤明徳

とまれとまれ
ただ羽のない手を上に下に移している
みつばちは
みつばちは飛んでいる
でも
みつばちは飛んでいく



名古屋大学郷土研究会 会員名簿及び住所録

68年度版

4年生 (祝卒業)

津坂峯隆	工学部	名古屋市南区四条町4の4 (〒457)	TEL 691-1966
樋口清司	理学部	四日市市富田一色町12の12 (〒512)	四日市 65-4720
山岸 章	経済学部	海部郡陸時町西今宿(服部防)光和屋子 (〒490-11)	海部 44-4118 0560
		(帰省地)石川県石川郡鶴来町月橋118 (〒920-21)	

*3年生 —

梶浦博一	工学部	四日市市富州原町8の12 (〒512)	四日市 65-0547
西川義永	経済学部	名古屋市港区港栄町7の57 (〒455)	661-2723

*2年生 —

伊藤明德	L211(文)	春日井市下市場町548 (〒486)	
西川 洋	L214(教)	名古屋市千種区猪苗町藤森作田137 (〒465)	701-7246
井村正博	S215(工)	四日市市東富田町28の30 (〒512)	
寺本忠司	S232(理)	名古屋市昭和区白金町6-31 (〒466)	871-0854
塚本正巳	S251(農)	名古屋市北区名城町2-9 (〒462)	
杉浦秀敏	S253(農)	碧海郡高浜町高取小林68 (〒444-13)	(0566)53-2482

*1年生 —

池田 全	L1-21	稲沢市日下部町松野438 (〒492)	
杉浦孝和	L1-23	豊田市元城町2の48 (〒471)	
浅井隆繁	L1-24	名古屋市熱田区三番町5の9 (〒456)	
平野善敏	L1-31	刈谷市小垣江東中根45の1 (〒448)	(0566)21-5936
伴 金美	L1-33	知多郡大府町吉田平地132の1 (〒474)	
高木義明	L1-33	名古屋市瑞穂区亀城町6の27a10 秀英荘	881-3997
		(帰省地)岐阜県不破郡関原町3125の8 (〒503-15)	
百瀬敏雄	S1-21	知多郡阿久比町福住 (〒470-22)	
水野 猛	S1-52	丹羽郡大口町豊田二見65 (〒480-01)	
柴田哲雄	S1-52	一宮市宮西通り5の10 (〒491)	-宮 73-2884
鈴木真吾	S1-52	蒲郡市三谷町東前62	0586

*先輩 — *

高島英明	工学部(昭40)卒	千葉県市原市山本44の4 宇部興産 山本寮 (〒290)
鈴木 弘	教育学部(昭42)卒	
保坂英雄	経済学部(昭42)卒	名古屋市中区西川端町9の22 (〒460)
松山 博	経済学部(昭42)卒	名古屋市昭和区丸屋町5の64 (〒466)
片山勝治	法学部(昭43)卒	常滑市久米字荒子47 (〒479)

郷風

所 委 行 集 集 編 編	頁 買 貢	名 長	古 池 高 杉 平 榮 和	屋 伴 田 本 浦 野 田 44	大 金 義 孝 善 哲 年	學 美 全 明 和 敏 雄 3	鄉 土	研 究	會 眞 敏 繁	吾 雄 猛 隆	品 売
日 行 発		昭				日 8 月		日	非		